

日 本  
生理学教室史

上 卷

1983年

日本生理学会  
教室史編集委員会

20.0  
N  
1

# 日本 生理学教室史

近代日本生理学 100 年の歩み

上 卷

浦本政三郎  
内山孝一 編  
名取禮二  
酒井敏夫



日本生理学会  
教室史編集委員会

# は し が き

名 取 禮 二

昭和33年5月金沢で開催された日本生理学会第35回大会において、明治以降の日本における生理学の歴史を100年史として編集することが提議され、浦本政三郎慈恵医大名誉教授が委員長となり、編集をはじめた。

教室史、業績史並びに生理学会史が計画され、教室史は当時の各大学生理学教室及び関連研究機関にそれぞれ執筆を依頼し、京城、台北両帝国大学及び満州医科大学については嘗っての教授に執筆を依頼した。業績史は抄録カードを集める方式をとり、領域別に取り纏め、生理学会史は編集委員会が執筆することになった。

教室史は順次日本生理学雑誌に掲載されたが、次第に原稿の集りが滞り、当初の完了予定が大幅に遅れた。また、業績カードはある程度集ったが、取り纏めるためには不十分であり、日本生理学雑誌に掲載された2領域を除き、中断された。生理学会史はその沿革が日本生理学雑誌に掲載されたが、上述の事由で業績史は計画を新にせざるを得なかった。しかし、相当部分が既印刷の教室史に関しては何とかして編集を完了したいと念願され、今日に至った。

此度酒井敏夫編集委員長の努力で、未掲載のものを集め、既印刷については追補をおこない、本書が刊行される運びになったことは責任を肩変わりさせた前委員長として寔に有難いことである。

なお、本計画の頭初と現在とではわが国の大学、研究所数が異なるのかかわらず、始めの計画を踏襲しているため、本書には新設大学の教室史が集録されていない。酒井委員長が敢て本書を上巻とした所以と思うが、この点は各位の諒恕を願いたい。

茲に編集委員会発足以来の経緯の一端を記して、本書刊行に対し深謝の意を表す。

昭和58年1月1日

# 目 次

はしがき	名 取 禮 二	1
日本生理学会準備会及び第1回～第60回大会記念撮影写真		3
日本生理学会の沿革	名 取 禮 二	67
昭和48年以後の日本生理学会の歩み	酒 井 敏 夫	81

## 各大学教室史

北海道大学医学部第一, 第二生理学教室史	87
北海道大学応用電気研究所生理部門史	100
北海道大学獣医学部生理学教室史	115
札幌医科大学第一, 第二生理学教室史	118
弘前大学医学部第一, 第二生理学教室史	130
岩手医科大学第一, 第二生理学教室史	146
東北大学医学部第一, 第二生理学教室史	161
東北大学医学部応用生理学教室史	170
東北大学医学部脳疾患研究施設神経生理学教室史	172
福島県立医科大学第一, 第二生理学教室史	174
新潟大学医学部第一, 第二生理学教室史	179
群馬大学医学部第一, 第二生理学教室史	196
群馬大学附置内分泌研究所生理学研究部史	211
千葉大学医学部第一, 第二生理学教室史	216
横浜市立大学医学部第一, 第二生理学教室史	232
日本大学医学部第一, 第二生理学教室史	246
日本大学歯学部生理学教室史	253
日本医科大学第一, 第二生理学教室史	265
東京大学医学部第一, 第二生理学教室史	272
東京大学医学部脳研究施設生理学部門史	312
順天堂大学医学部第一, 第二生理学教室史	322
東京医科歯科大学医学部第一, 第二生理学教室史	334
東京医科歯科大学医学部心臓血管病研究施設生理研究部史	344
東京医科歯科大学難治疾患研究所生理学部門史	352
東京医科歯科大学歯学部生理学教室史	354
慶応義塾大学医学部生理学教室史	360
東京医科大学第一, 第二生理学教室史	376
東京女子医科大学第一, 第二生理学教室史	383
東京慈恵会医科大学第一, 第二生理学教室史	403

昭和大学医学部第一, 第二生理学教室史	418
東邦大学医学部第一, 第二生理学教室史	435
信州大学医学部第一, 第二生理学教室史	448
信州大学医学部順応医学研究施設順応生理学教室史	469
金沢大学医学部第一, 第二生理学教室史	471
金沢大学医学部附属神経情報研究施設情報伝達研究部門史	478
岐阜大学医学部第一, 第二生理学教室史	480
名古屋大学医学部第一, 第二生理学教室史	486
名古屋大学環境医学研究所と第五部門航空医学教室史	499
名古屋市立大学医学部第一, 第二生理学教室史	503
三重大学医学部第一, 第二生理学教室史	512
京都大学医学部第一, 第二生理学教室史	521
京都府立医科大学第一, 第二生理学教室史	526
奈良県立医科大学第一, 第二生理学教室史	538
関西医科大学第一, 第二生理学教室史	543
大阪医科大学第一, 第二生理学教室史	550
大阪市立大学医学部第一, 第二生理学教室史	557
大阪大学医学部第一, 第二生理学教室史	564
大阪大学医学部高次神経研究施設神経生理研究部史	580
和歌山県立医科大学第一, 第二生理学教室史	588
神戸大学医学部第一, 第二生理学教室史	597
鳥取大学医学部第一, 第二生理学教室史	606
岡山大学医学部第一, 第二生理学教室史	610
東京慈恵会脈管学研究所史	623
広島大学医学部第一, 第二生理学教室史	633
山口大学医学部第一, 第二生理学教室史	639
徳島大学医学部第一生理学教室史	652
九州大学医学部第一, 第二生理学教室史	659
久留米大学医学部第一, 第二生理学教室史	667
長崎大学医学部第一, 第二生理学教室史	672
熊本大学医学部第一, 第二生理学教室史	695
熊本大学体質医学研究所生理学研究部史	713
鹿児島大学医学部第一, 第二生理学教室史	720
滿洲医科大学生理学教室史	730
京城帝国大学医学部生理学教室史	739
台北帝国大学医学部生理学教室史	743

日本生理学教室史上巻の編集を終えて

酒井敏夫…… 745

# 日本生理学会準備会及び 第1回～第60回大会記念撮影写真

## 生理学学会発会準備会記念写真

日本生理学学会の沿革の中で発足当時の模様を藤田敏彦教授の談話として次のように述べられている。「京都の日本医学会総会・分科会の機会に急転歩で生理学学会が生まれた。誰から発案せられたかは忘れたが、医化学、薬物学へ気兼ねすることなく生理学だけでやって行こうではないかということで瞬く間に衆議一決、思い立ったが吉年、善は急げで早速その同じ大正11年の7月に第1回東京で開くことになった。」



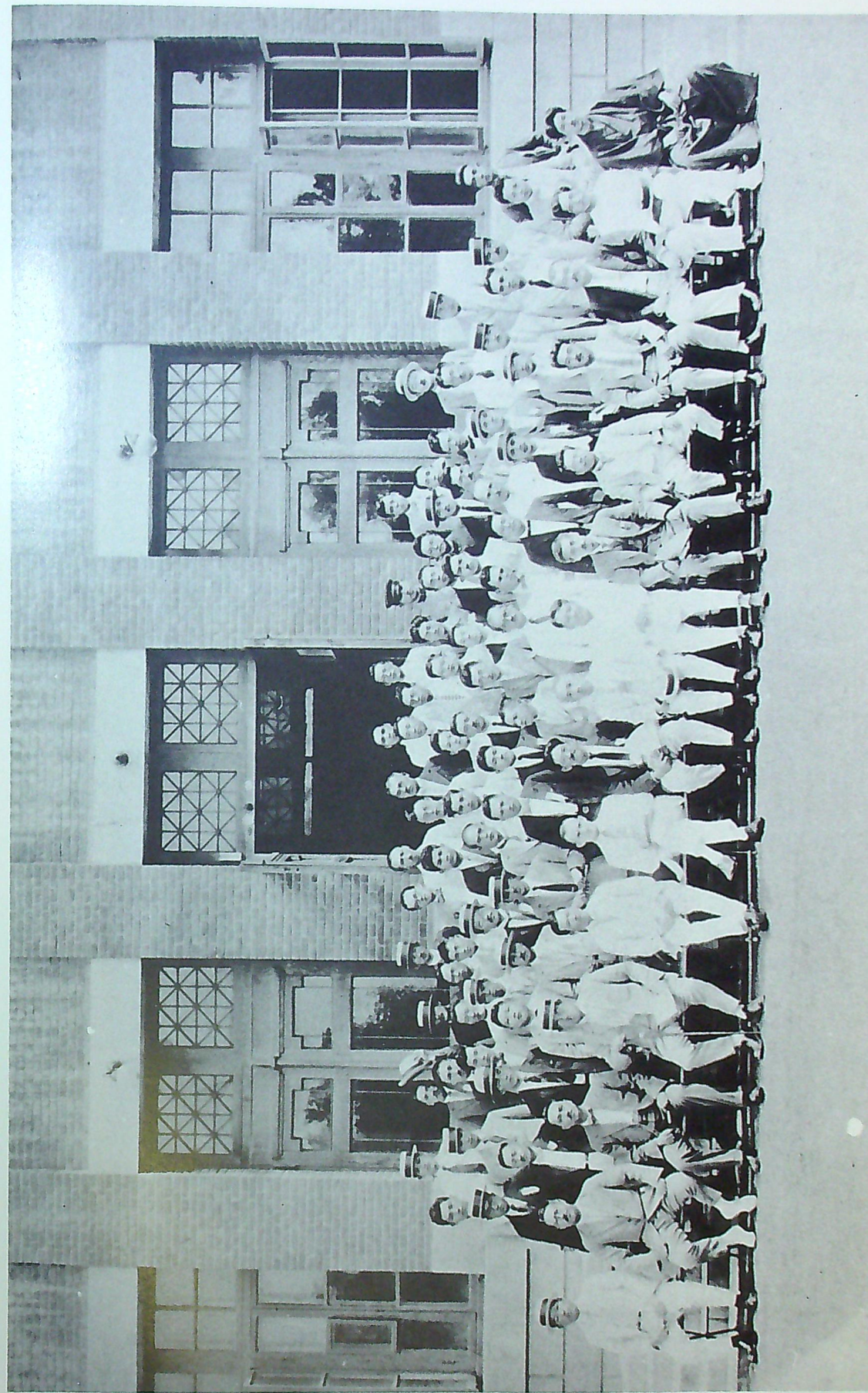
第1列 向って左より、石川日出鶴丸、酒井卓造、藤田敏彦、生沼曹六、木下東作、天谷千松、石原誠、高安慎一、佐武安太郎、  
第2列目には、黒田源次、越智真逸、板垣政参、浦本政三郎、牧亮吉、大塚藤吉、久保盛徳、正路倫之助、  
第3列には、勝義孝、操担道、幸塚嘉一、西丸和義諸先生の姿が見える。



第1回 日本生理学学会大会懇親会  
大正11年(1922)7月 東大



第2回 日本生理学会大会  
大正12年(1923) 4月 九大



第3回 日本生理学会大会  
大正13年(1924) 7月 東北大



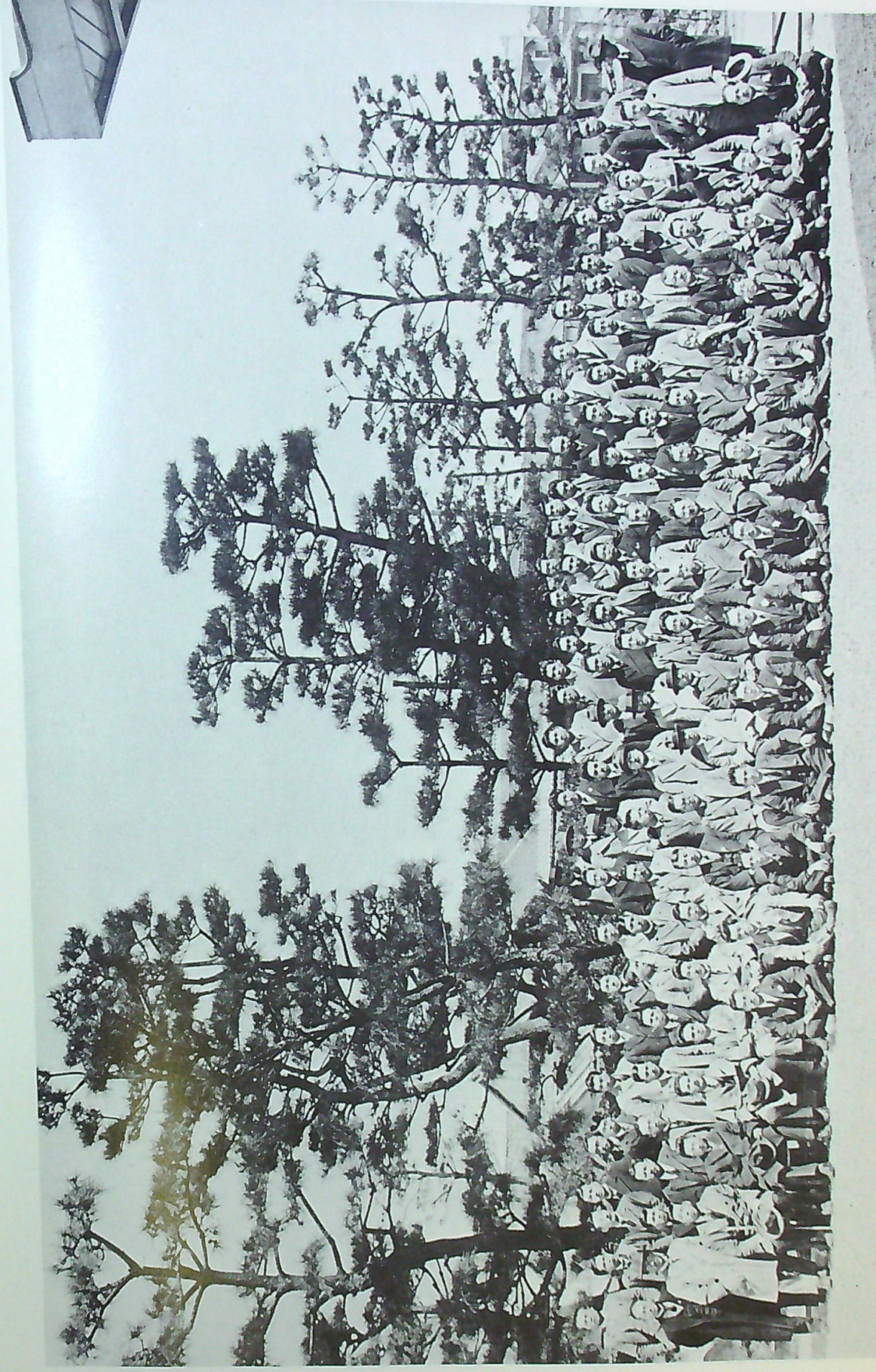
第4回 日本生理学会大会  
大正14年(1925)8月 満州医大



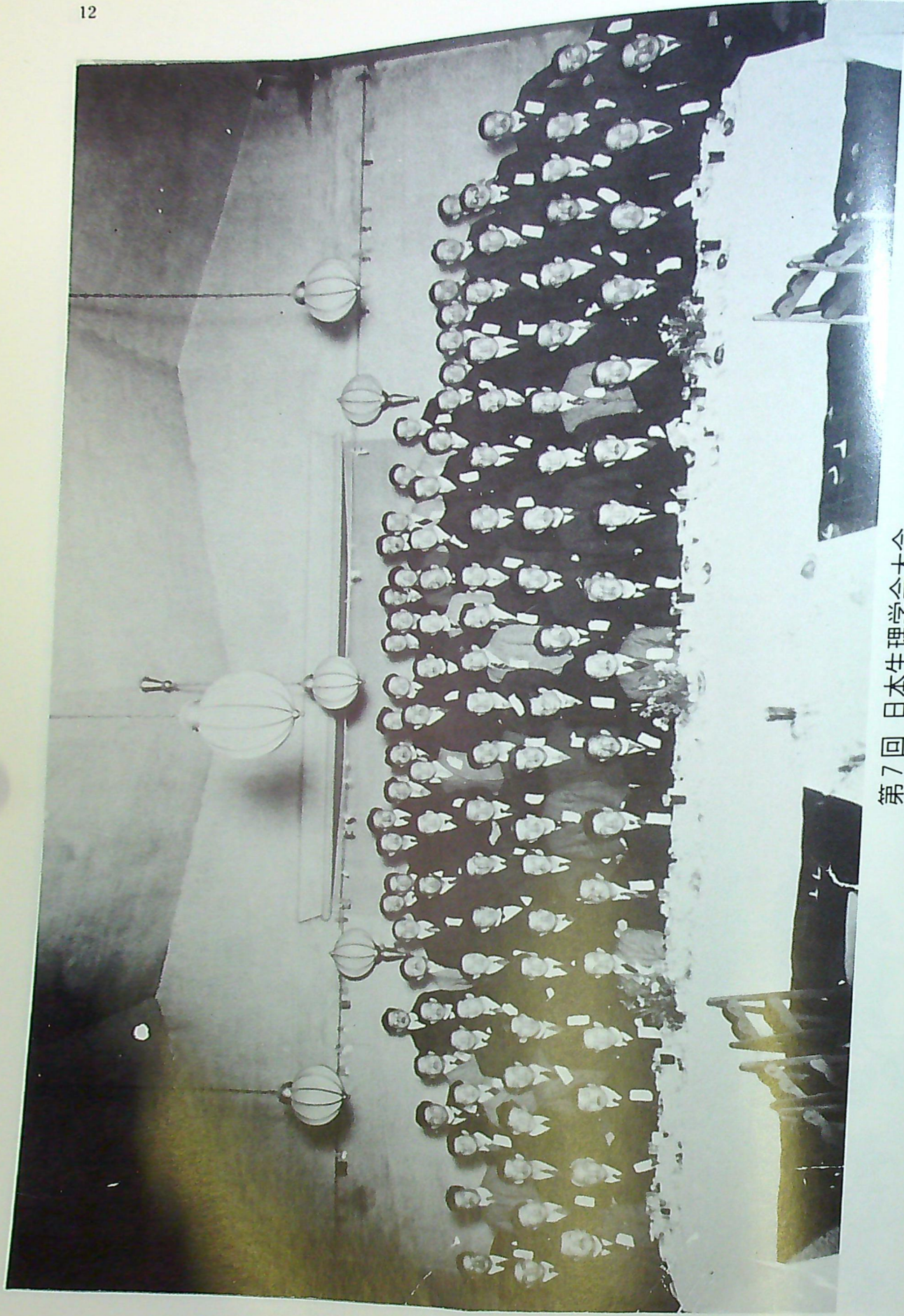
第4回 日本生理学会大会を終えて、瀋陽郊外の名所めぐりでつろいだところ。



第5回 日本生理学会大会  
大正15年(1926) 東大



第6回 日本生理学会大会  
昭和2年(1927) 4月 岡山医大



第7回 日本生理学会大会  
昭和3年(1982)4月 京大



第8回 日本生理学会大会  
昭和4年(1929)7月 北大



第9回 日本生理学会大会  
昭和5年(1930)4月 阪大



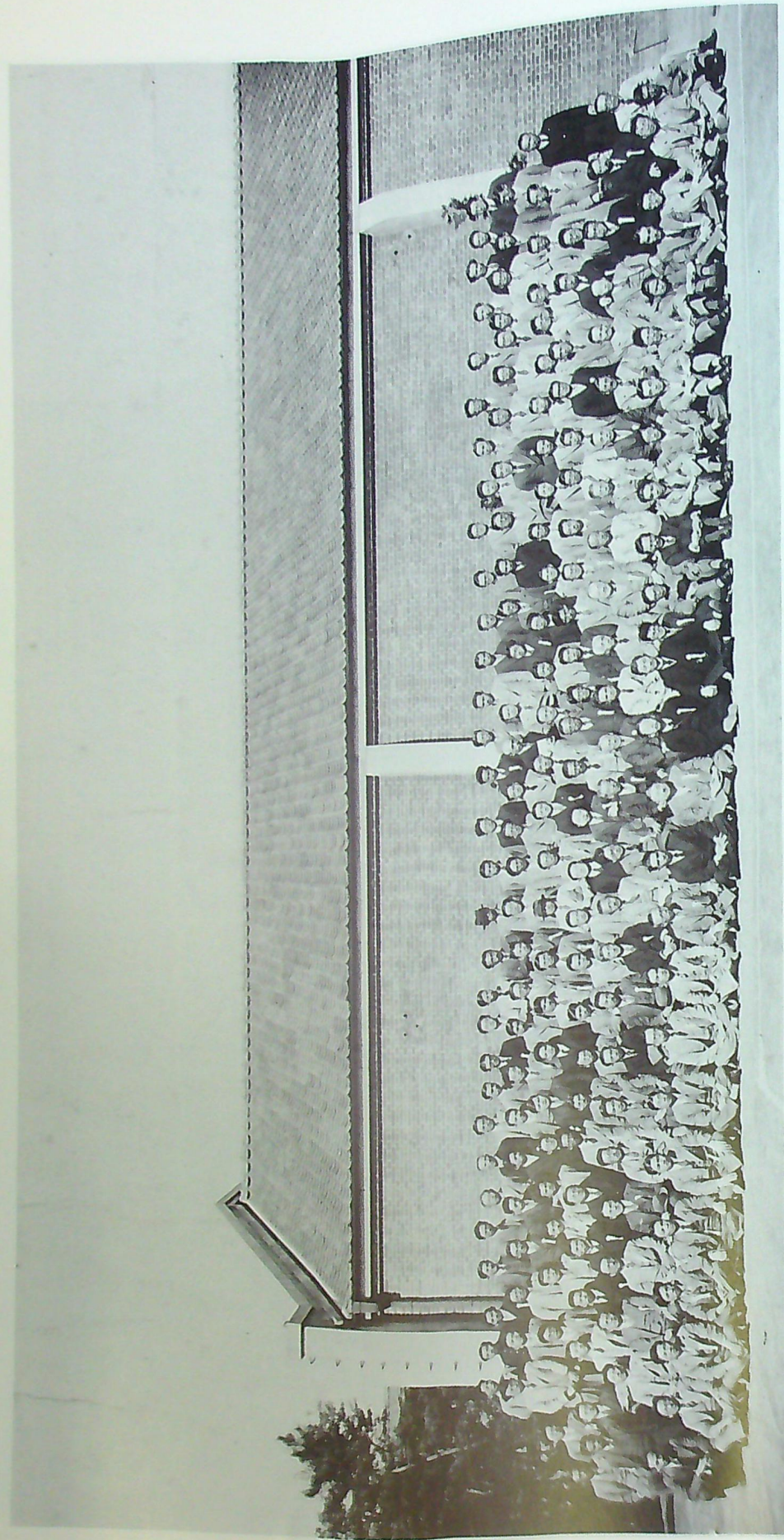
第10回 日本生理学会大会  
昭和6年(1931)3月 長崎医大



第11回 日本生理学会大会  
昭和7年(1932)3月 新潟医大



第12回 日本生理学会大会  
昭和8年(1933)7月 金沢医大



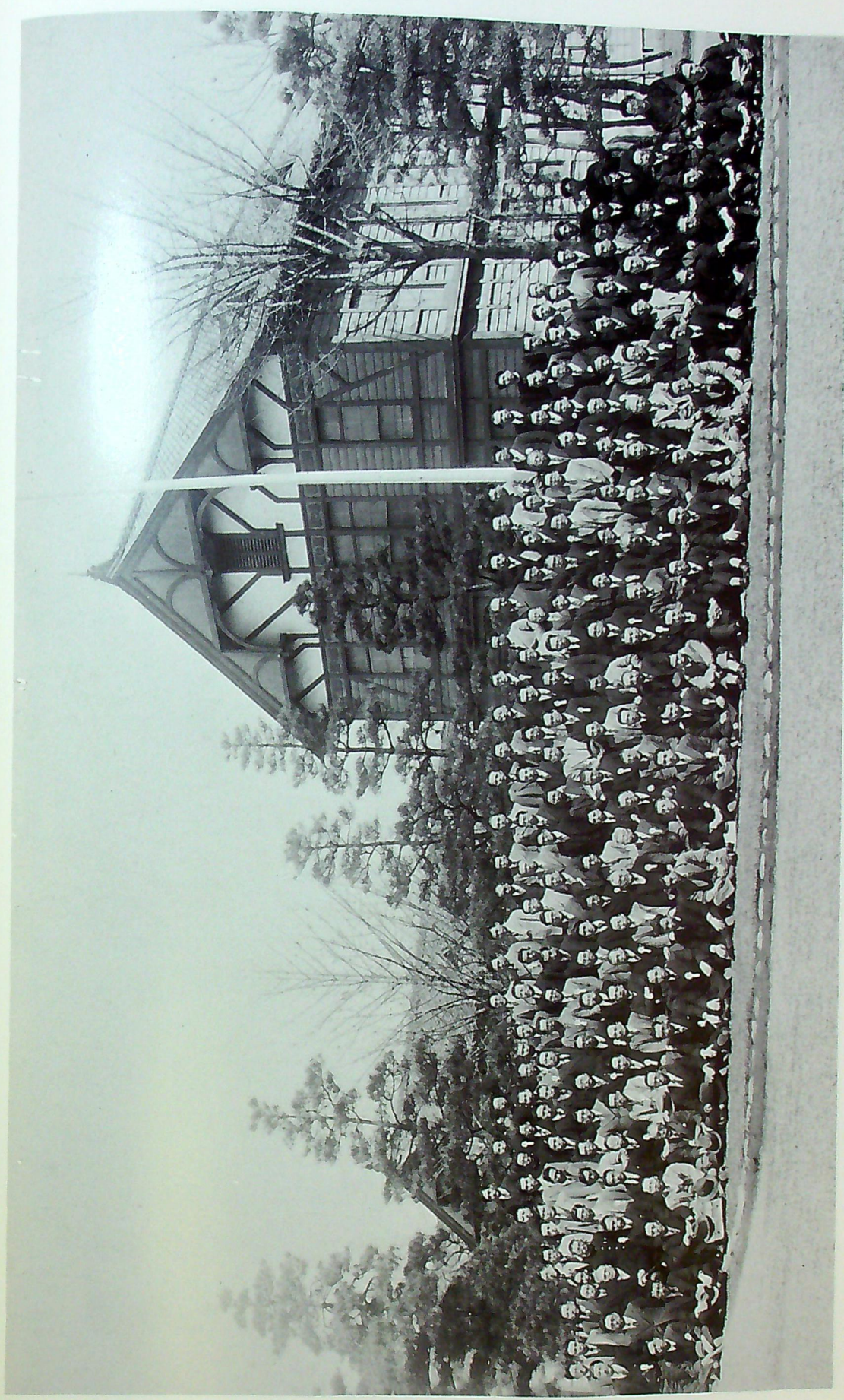
第15回 日本生理学会大会  
昭和11年(1936)10月 劳研



第16回 日本生理学会大会  
昭和12年(1937)4月 名古屋医大



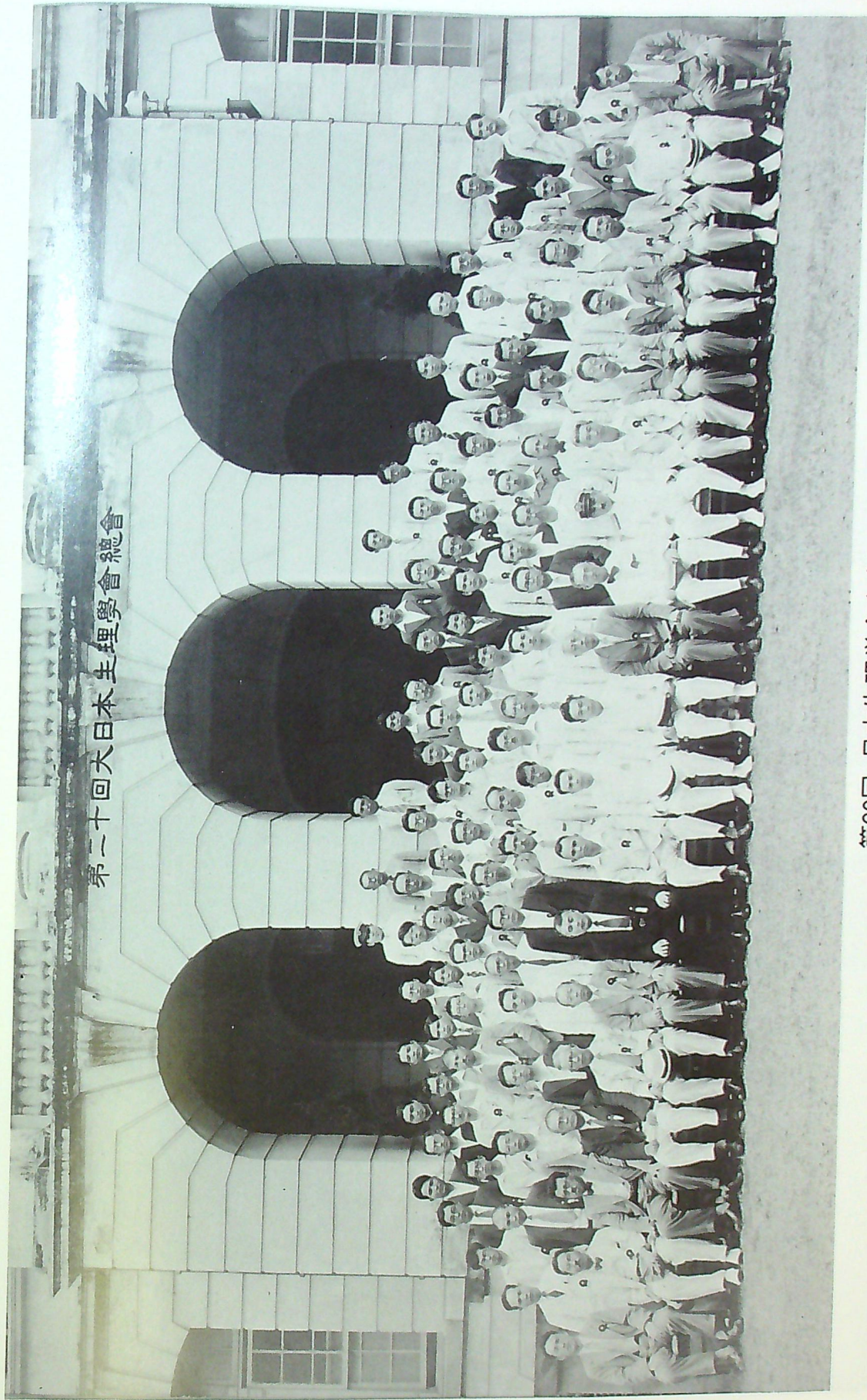
第17回 日本生理学会大会  
昭和13年(1933)4月 京大



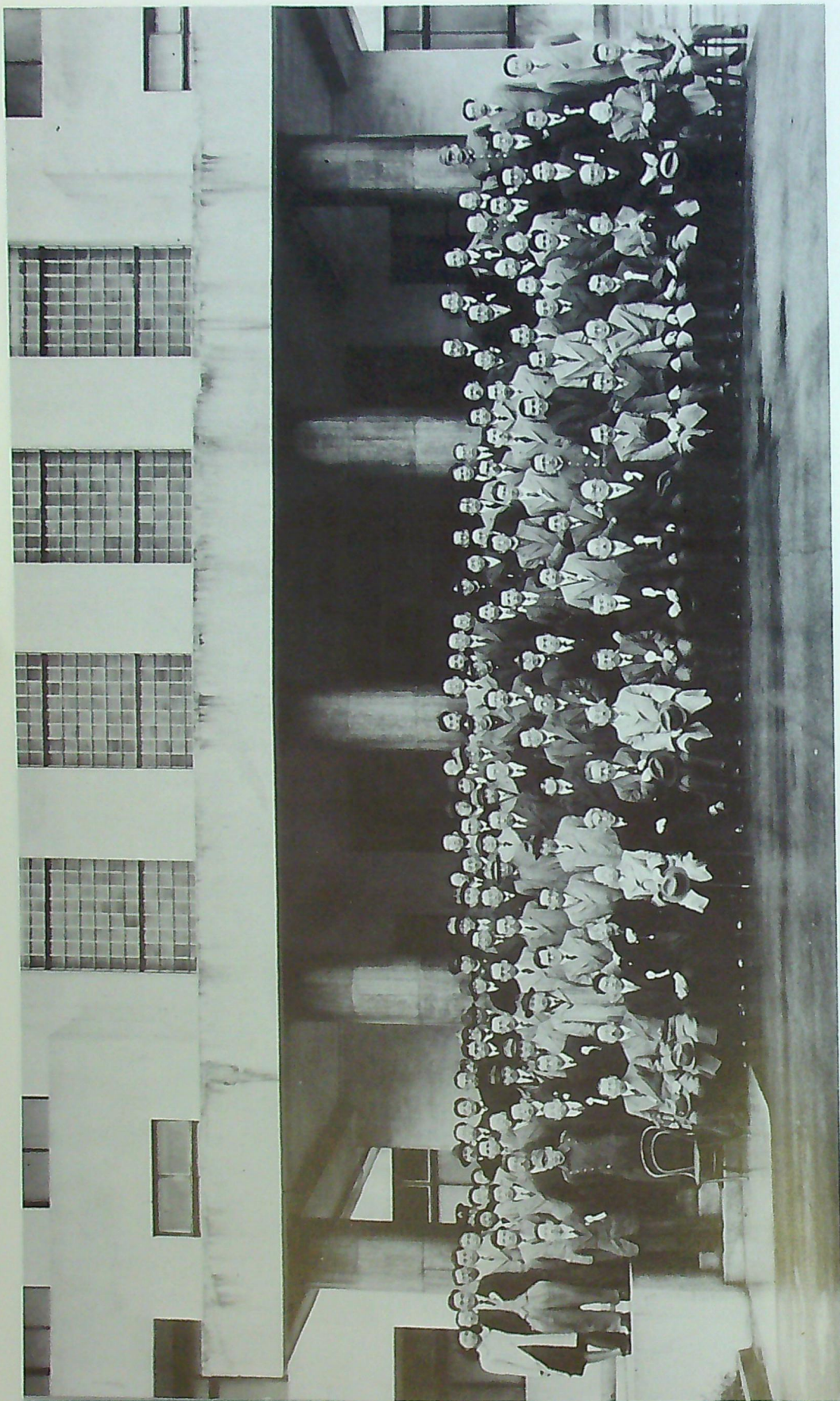
第18回 日本生理学会大会  
昭和14年(1939)4月 熊本医大



第19回 日本生理学会大会  
昭和15年(1940)4月 千葉医大



第20回 日本生理学会大会  
昭和16年(1941)7月 台北大



第22回 日本生理学会大会  
昭和18年(1943) 3月 九大



第23回 日本生理学会大会  
昭和21年(1946)11月 東北大



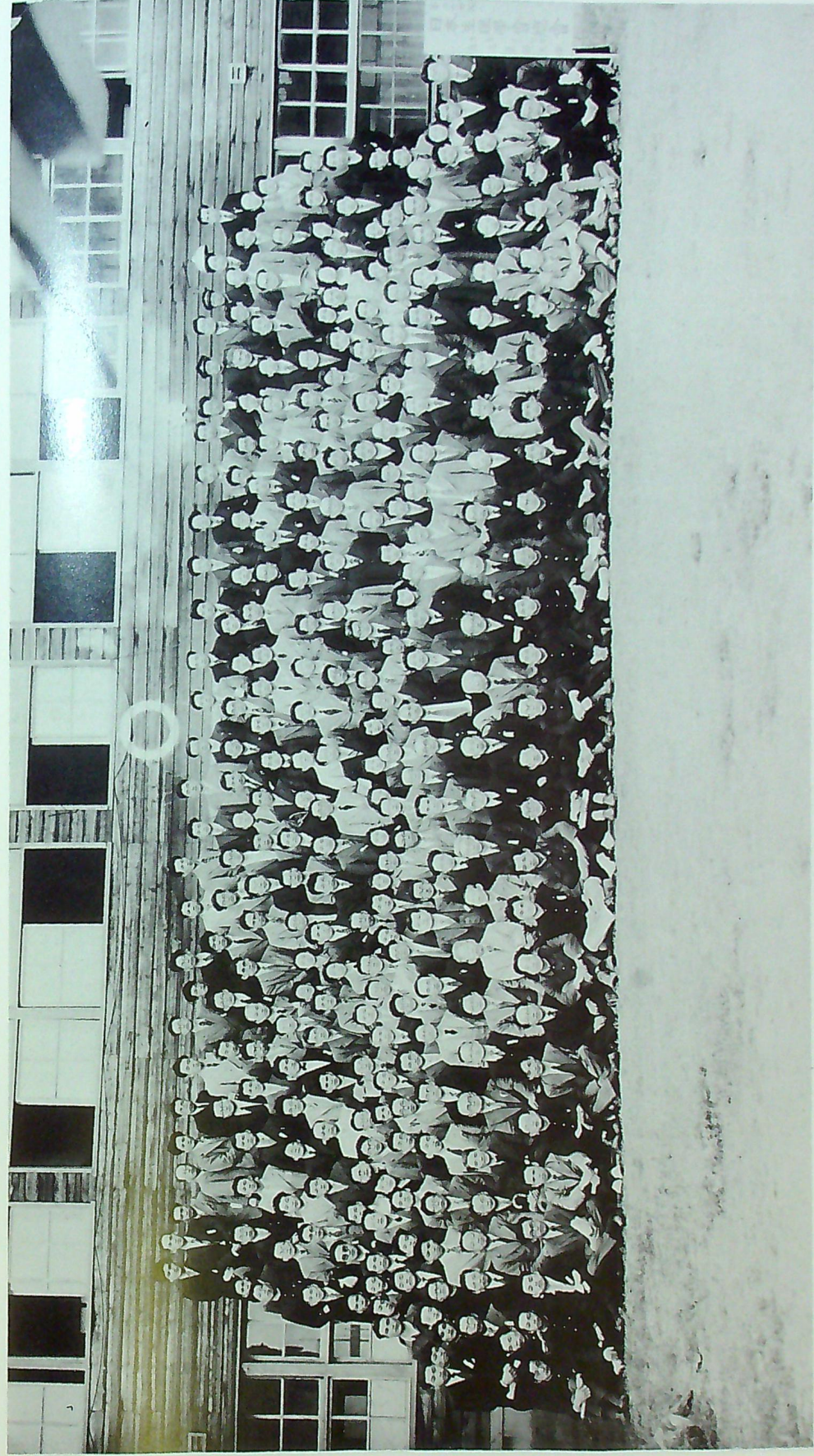
第24回 日本生理学会大会  
昭和22年(1947) 4月 阪大



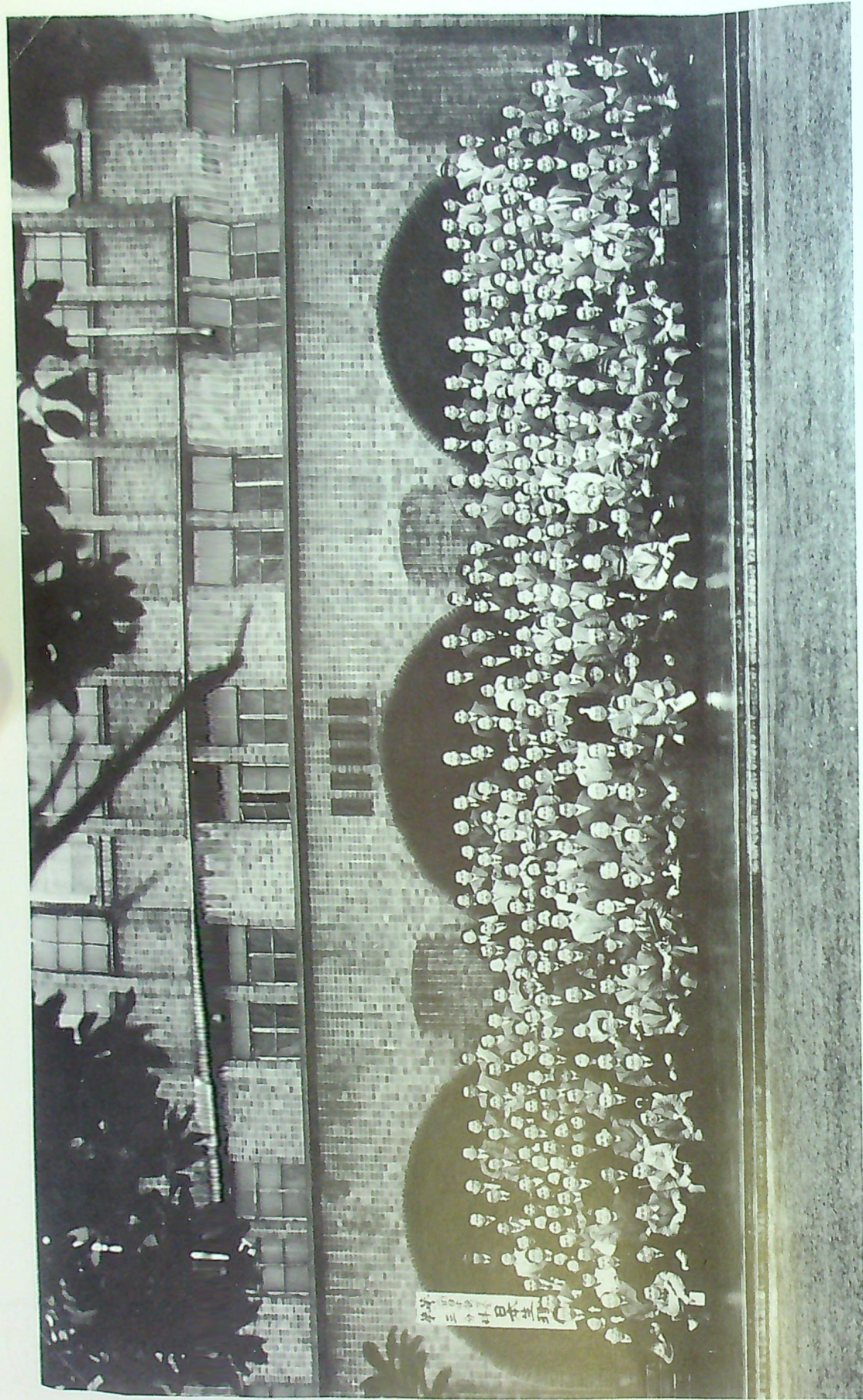
第25回 日本生理学会大会  
昭和23年(1948) 5月 新潟大



第26回 日本生理学会大会  
昭和24年(1949) 4月 京大



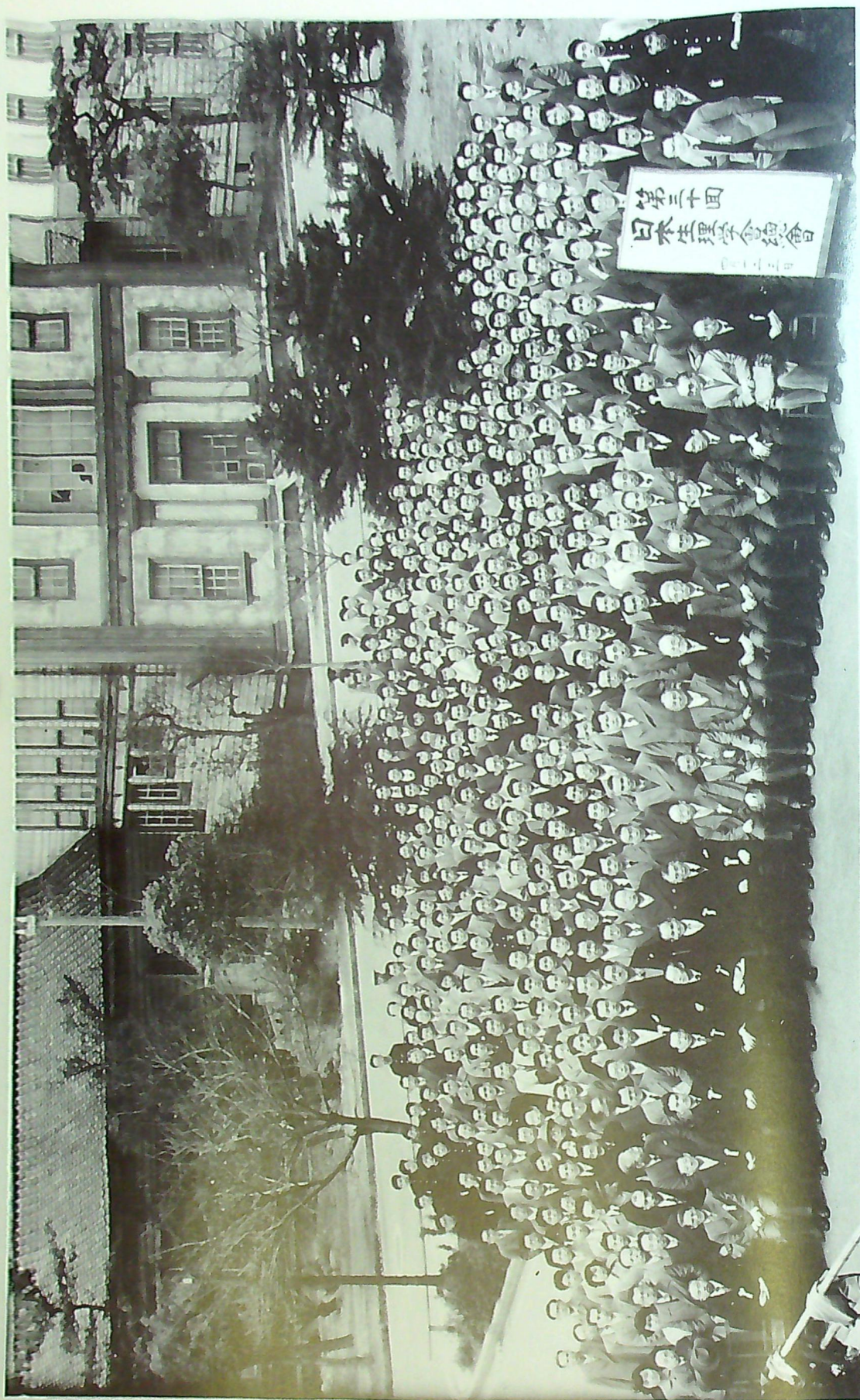
第27回 日本生理学会大会  
昭和25年(1950) 5月 広島医大



第28回 日本生理学会大会  
昭和26年(1951)4月 東大



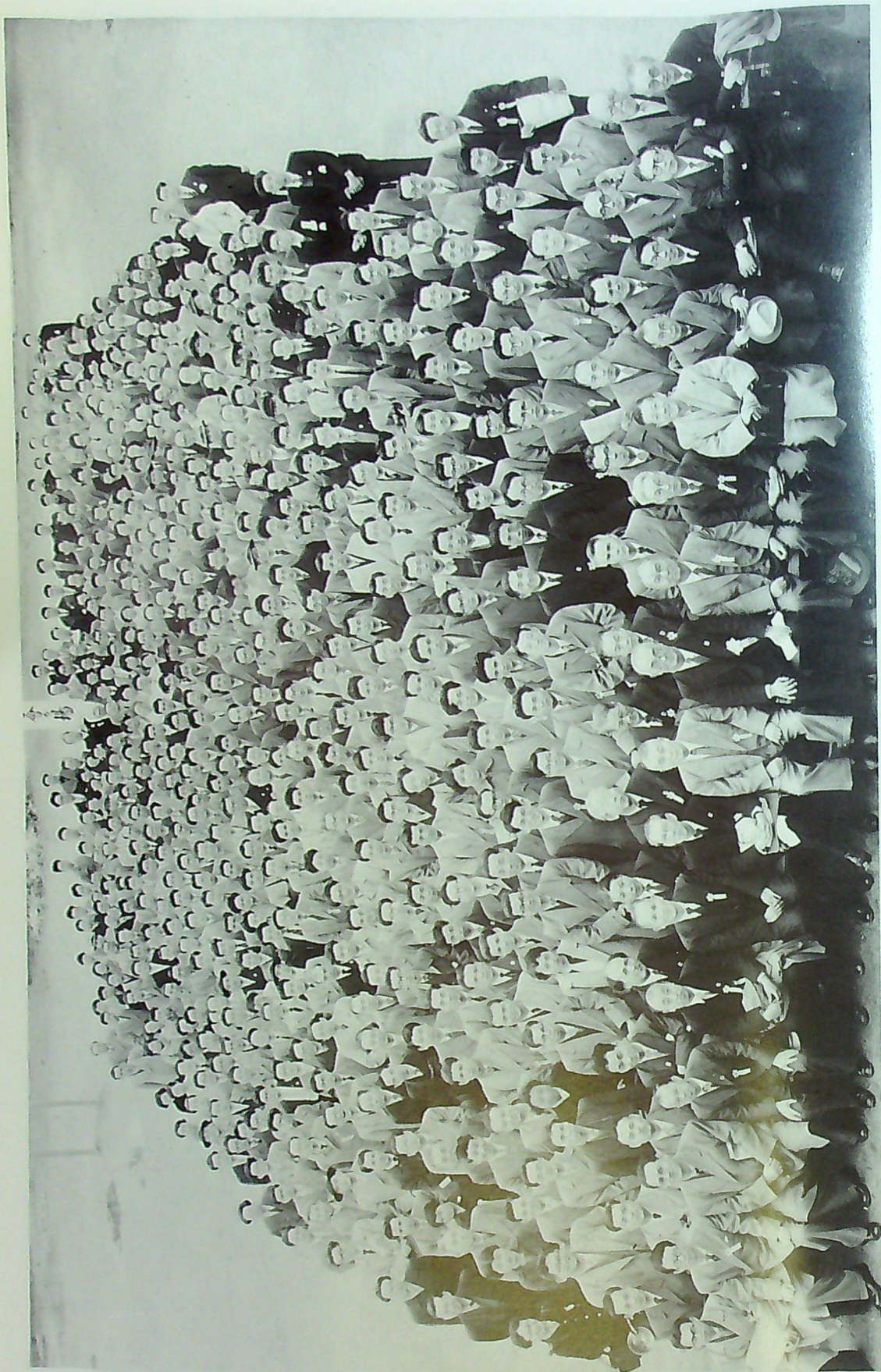
第29回 日本生理学会大会  
昭和27年(1952)7月 北大



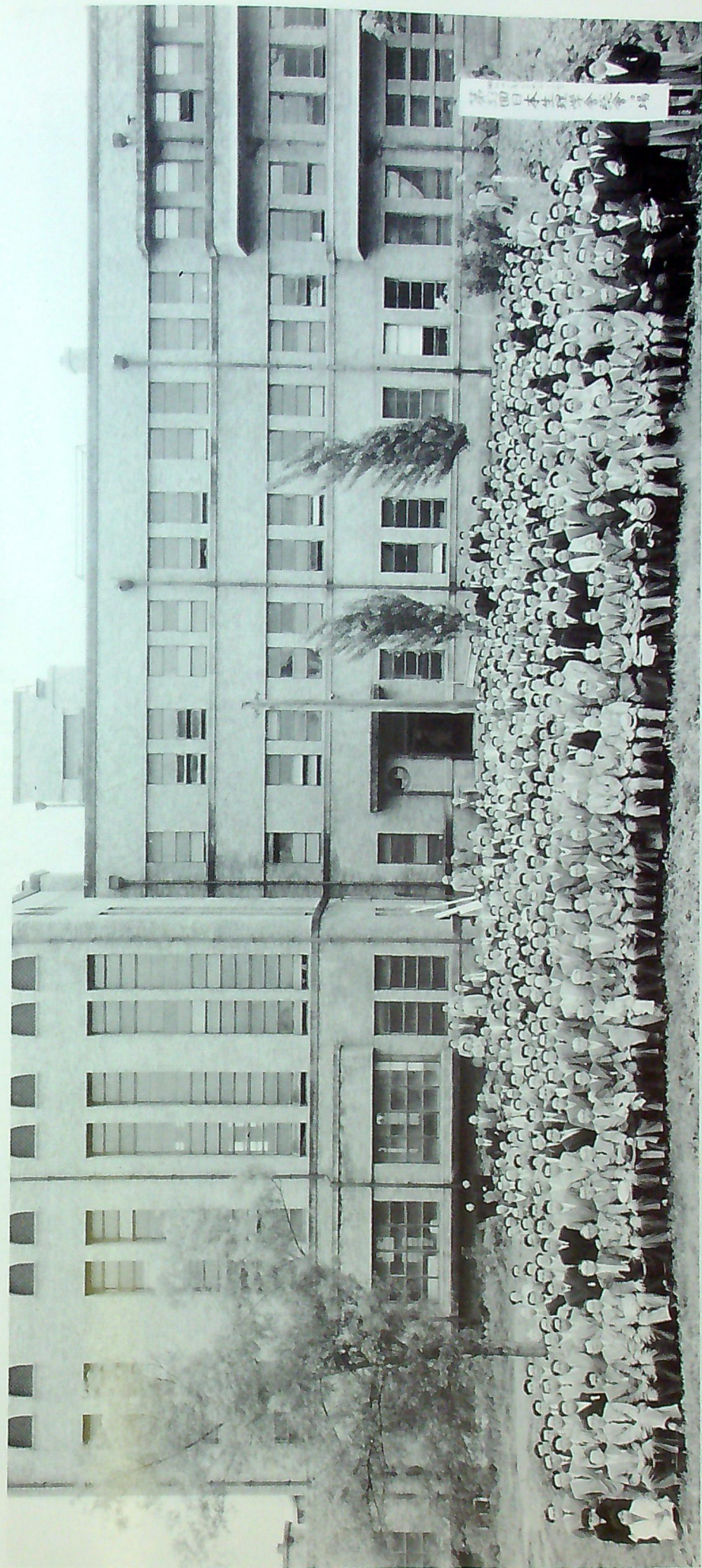
第30回 日本生理学会大会  
昭和28年(1953)4月 九大



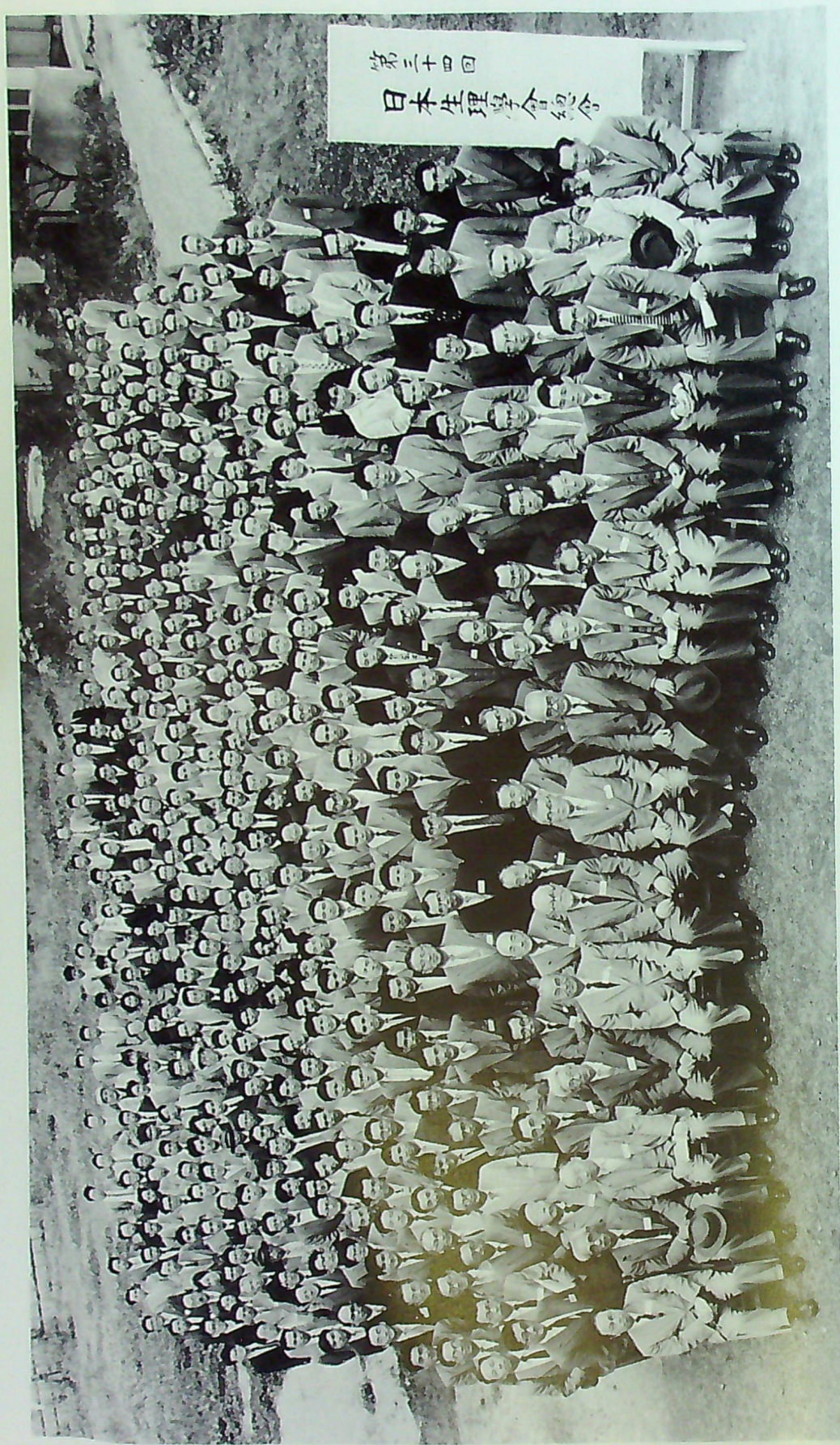
第31回 日本生理学会大会  
昭和29年(1954)5月 名大



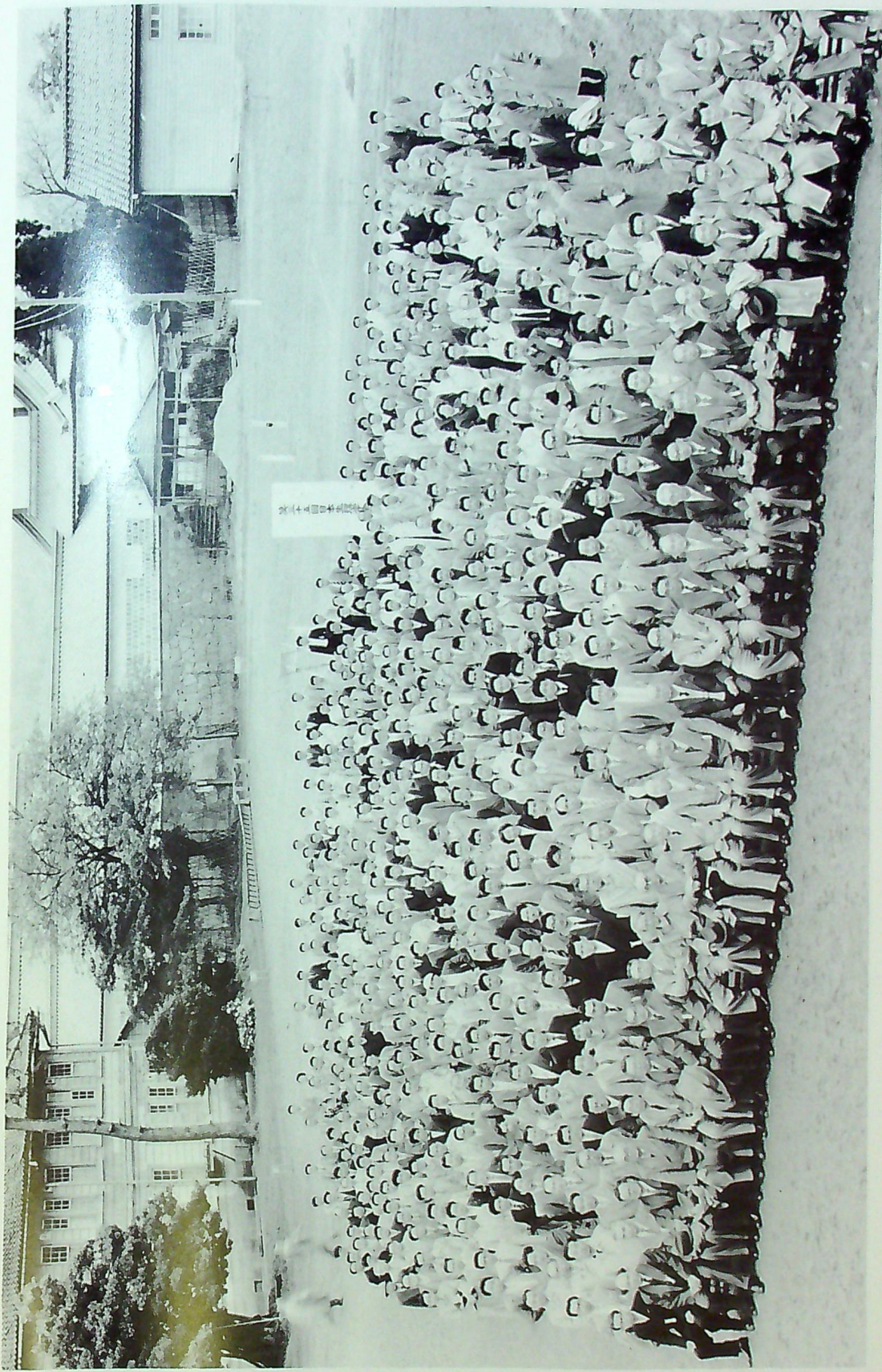
第32回 日本生理学会大会  
昭和30年(1955) 4月 京大



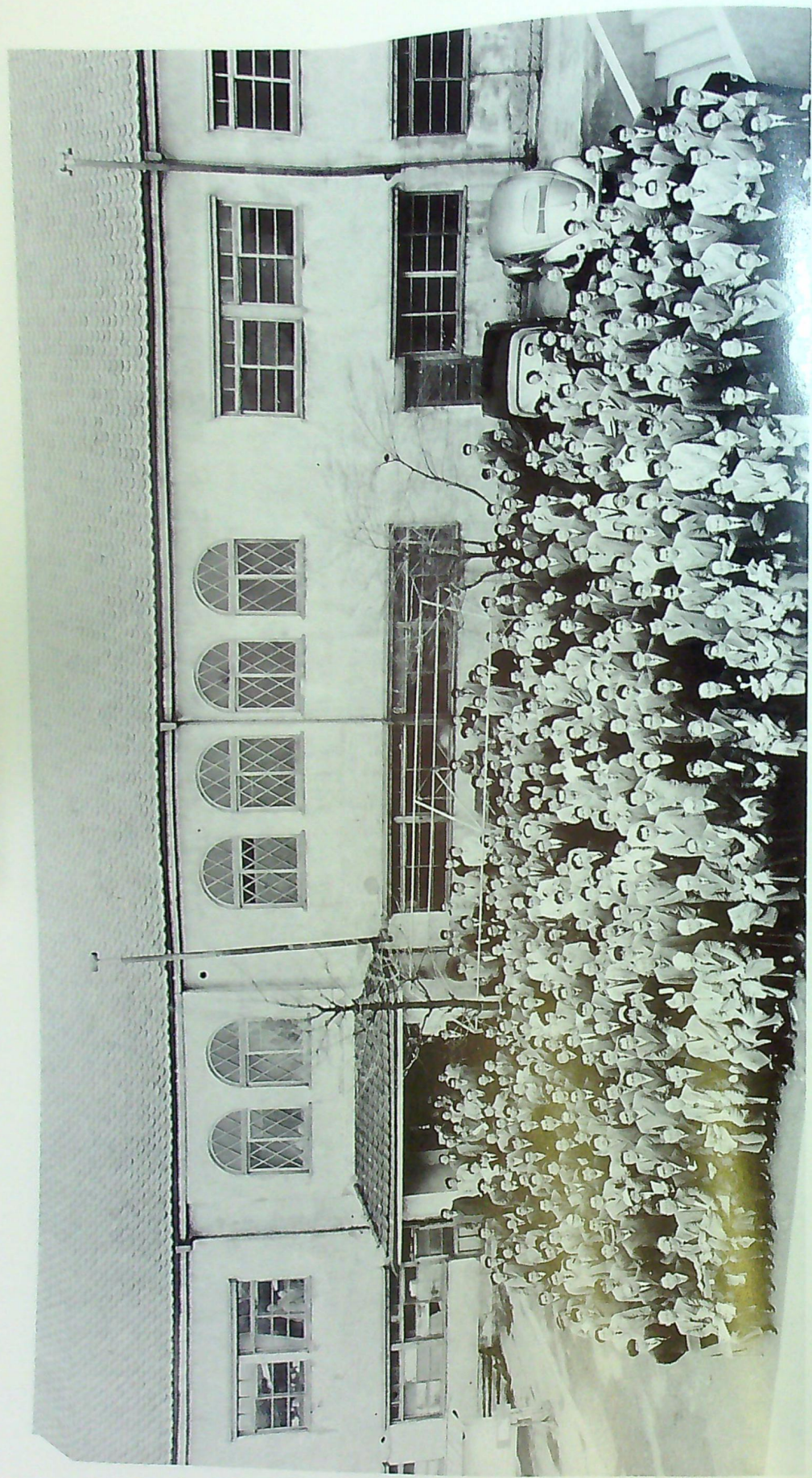
第33回 日本生理学会大会  
昭和31年(1956) 5月 岡山大



第34回 日本生理学学会大会  
昭和32年(1957)5月 神戸医大



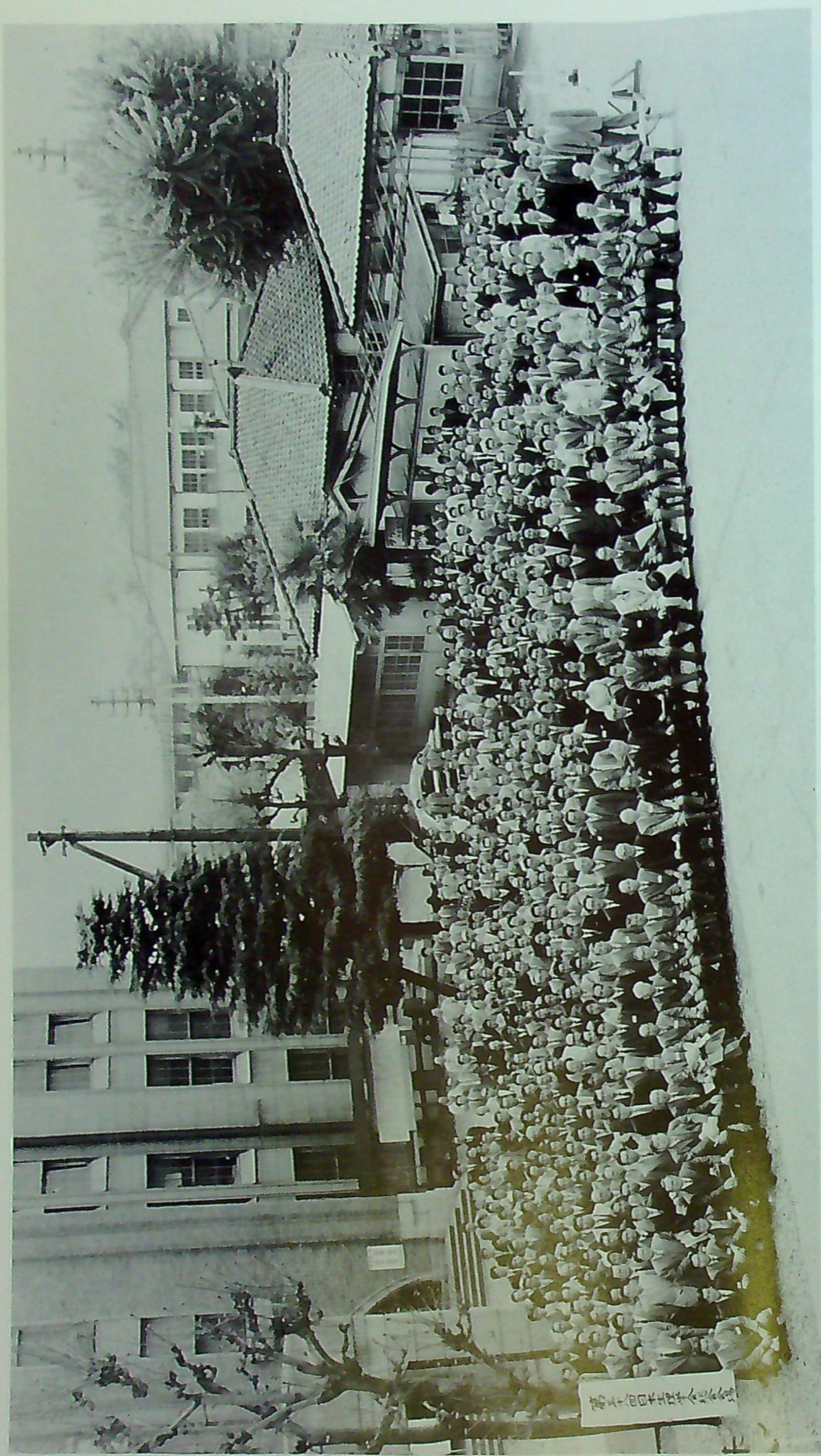
第35回 日本生理学学会大会  
昭和33年(1958)5月 金沢大



第36回 日本生理学会大会  
昭和34年(1959)3月 日本医大



第37回 日本生理学会大会  
昭和35年(1960)4月 徳島大



第38回 日本生理学会大会  
昭和36年(1961)4月 京都府立医大



第39回 日本生理学会大会  
昭和37年(1962)7月 弘前大



第40回 日本生理学会大会  
昭和38年(1963)4月 阪大



第41回 日本生理学会大会  
昭和39年(1964)4月 千葉大



第42回 日本生理学会大会 (A・B会場)  
昭和40年(1965) 5月 岐阜大



第42回 日本生理学会大会 (C会場)



第42回 日本生理学会大会 (D・E会場)



第43回 日本生理学会大会  
昭和41年(1966)5月 信州大



第44回 日本生理学会大会  
昭和42年(1967) 3月 名大



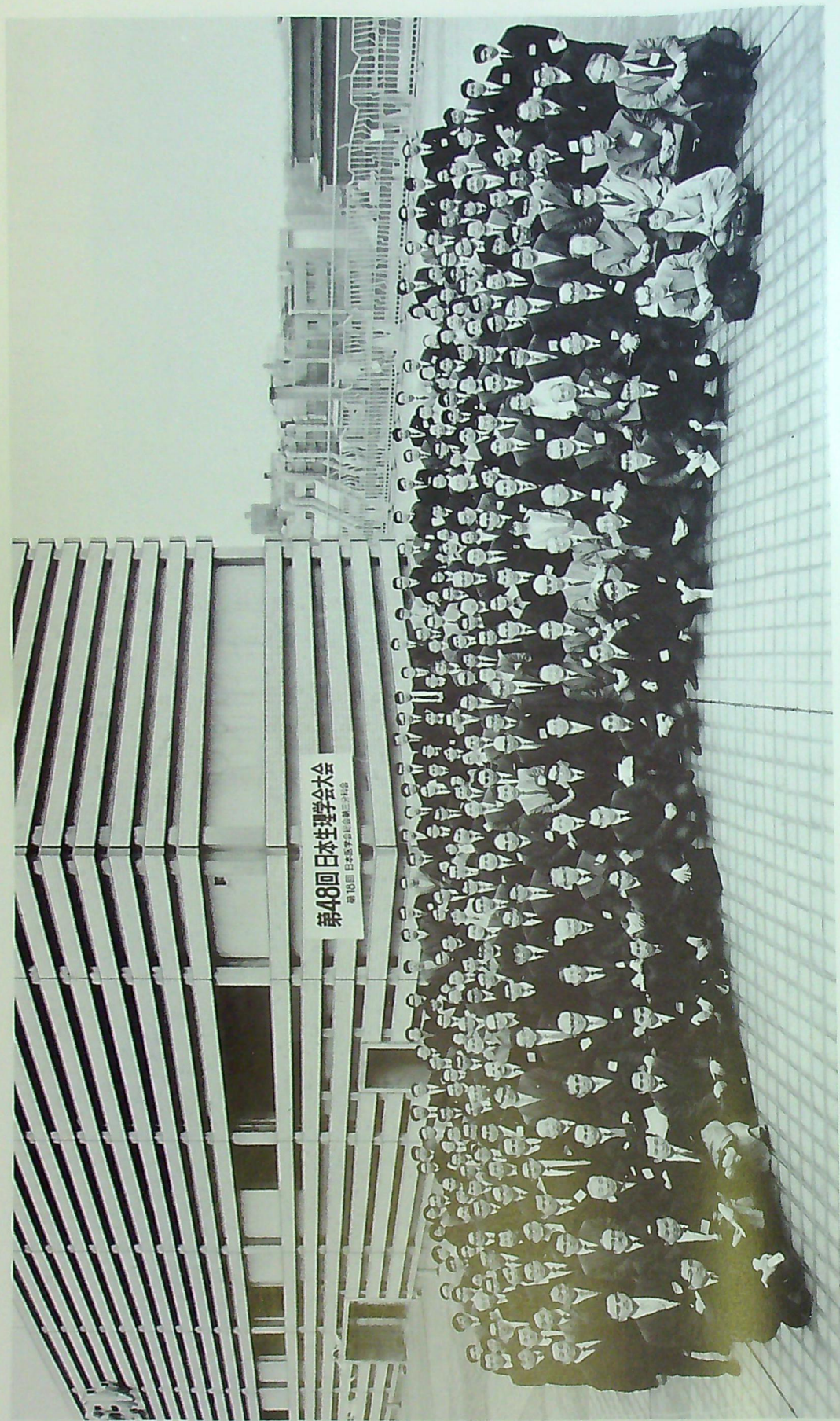
第45回 日本生理学会大会  
昭和43年(1968) 4月 熊本大



第46回 日本生理学会大会  
昭和44年(1969)4月 鳥取大



第47回 日本生理学会大会  
昭和45年(1970)4月 昭和大



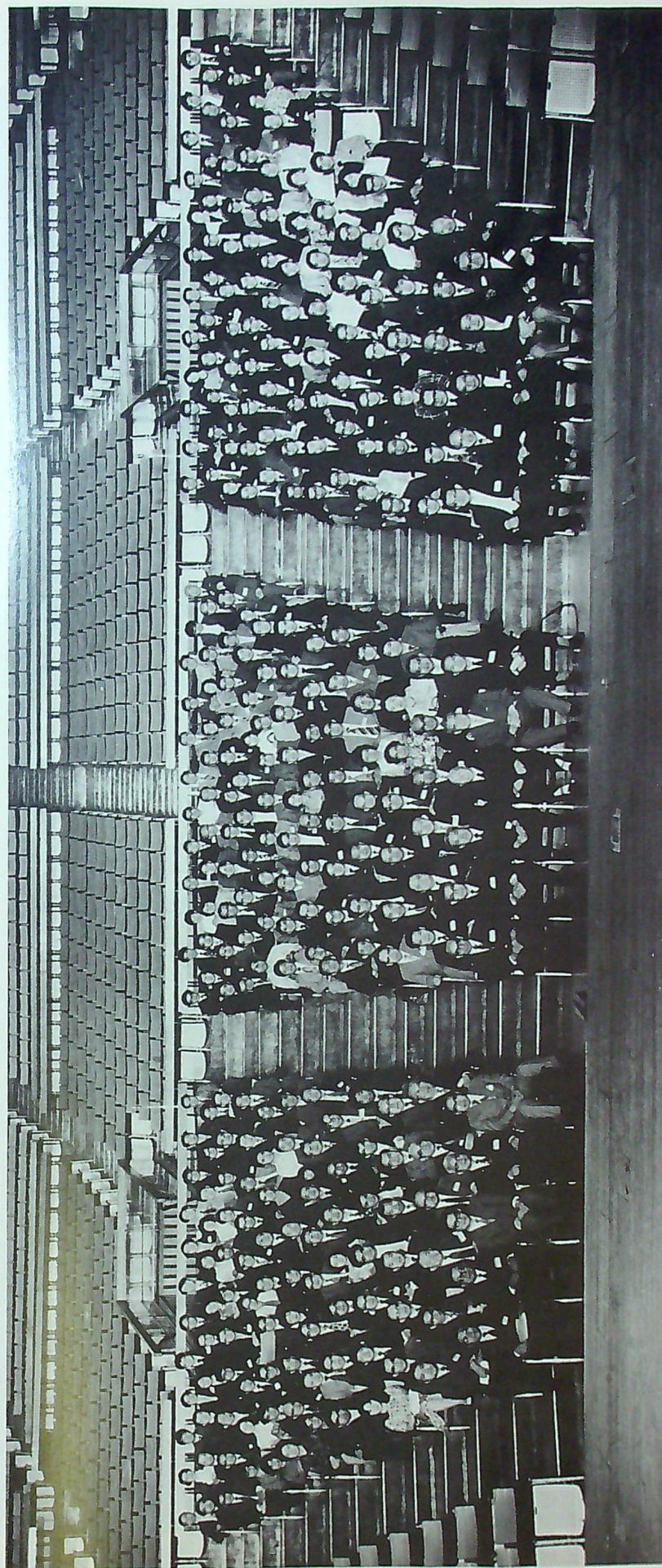
第48回 日本生理学会大会  
昭和46年(1971)4月 東京医歯大



第49回 日本生理学会大会  
昭和47年(1972)5月 岩手医大



第50回 日本生理学会大会  
昭和48年(1973)4月 九大



第51回 日本生理学会大会  
昭和49年(1974)6月 北大



第52回 日本生理学会大会  
昭和50年(1975)4月 三重大



第53回 日本生理学会大会  
昭和51年(1976)6月 東北大



第54回 日本生理学会大会  
昭和52年(1977)4月 鹿児島大



第55回 日本生理学会大会  
昭和53年(1978)4月 新潟大



第56回 日本生理学会大会  
昭和54年(1979)4月 慈恵医大



第57回 日本生理学会大会  
昭和55年(1980)3月 神戸大



第58回 日本生理学学会大会  
昭和56年(1981)4月 徳島大



第59回 日本生理学学会大会  
昭和57年(1982)3月 慶応大



第60回 日本生理学会大会  
昭和58年(1983)4月 阪大

## 日本生理学会の沿革

日本生理学史編集委員会前編集委員長  
名 取 禮 二

### 1. 学会組織以前

明治35年(1902)4月に田口和美会頭、北里柴三郎副会頭の下で東京で開かれた第1回日本聯合医学会が日本生理学会の芽生えになる。当時、解剖、外科、産婦人科、小児科、眼科、皮膚科などいくつかの専門学会ができていたが、他は東京医学会その他各科を包含した会合であった。聯合医学会はそれら各医学会に呼びかけてつくられたものであるが、第2部が生理学、医化学であり隈川宗雄部長の下に2題の講演が記録されている。聯合医学会は4年毎に開催されることになり、第3回(明治43年4月)は大阪で開かれ、この時に名称が日本医学会に改名された。

第4回日本医学会、大正3年(1914)4月に第2分科は生理学、医化学、薬物学となり、範囲が広がり、演題も20を数えた。

第6回日本医学会、大正11年(1922)4月が日本生理学会にとっては一つの転機になる。第2分科は森島庫太分科会長の下に出題63供覧1を数え、生理学が医化学、薬物学の共同学会から脱皮する気運が加速された。

大正11年(1922)前後は本邦の医学教育制度の転換期であり、それまで東大、京大、九大、東北大の各帝国大学医学部以外は専門学校であったのが、大正7年(1918)に北海道帝国大学医学部が開設され、大正9年(1920)新大学令による医学部として慶応大学医学部が発足したのを契機として官公私立の医学専門学校が逐次医科大学となり、帝国大学医学部と官公私立の単科医科大学は京城帝国大学医学部、満州医科大学を合せて19校になった。なお、台北帝国大学医学部が加わったのは昭和11年(1936)である。

昇格また新設された医学部、医科大学に生理学の講座がつけられ、既存の帝国大学生理学教室から若い研究者が陸続として生理学教室主任

教授になるにおよんで、自ら研究発表のために専門の学会結成を望む声が大になったと思われる。

当時の憶い出として藤田敏彦教授が日本生理学雑誌第20巻完結記念号で述べられたことを引用すると「京都の分科会の機会に急転歩で生理学学会が生れた。誰から発案せられたかは忘れたが、医化学、薬物学へ気兼ねすることなく生理学だけでやって行こうではないか、ということで瞬く間に衆議一決、思い立ったが吉年善は急げで、早速その同じ大正11年の7月に第1回を東京で開くことになった。」その頃の意気込みが目の当たりに浮んでくる。

### 2. 学会結成から組織づくりまで

大正11年(1922)7月10、11日に東大で開かれた第1回の大日本生理学学会としての第1歩である。

申合せによって、例年学術報告のための大会を開くことになったが、学会発足当時の気風は自由主義調が高いもので、浦本政三郎教授の近世日本生理学思想史論の一文を引用すると、「従来我が生理学の最も特徴と認められることは外見極めて自由主義的で何等の拘束なく、したがって会長を定むる事なく、その大会は開催校の教授を以て当番幹事とし、来会者を以て会員とし、而かも極めて活気を呈した学会の一つであった。」この気風は今日まである意味では継承されているが、この文からも窺われるように日本生理学学会は、当初は有志の集りに近かったが、運営上事務局を東大に置き、橋田邦彦教授が常任幹事になった。大学などの主任教授が評議員となり、毎年大会時に、次回開催校の決定や諸般の事項の意見が提供された。当番会長が決められるとあとは一切が任せられ、各大学、研究所などに大会開催の通知その他の事務連絡

が行なわれ、大会の抄録集がつくられた。  
 しかし、このような状態が新しい問題を産み出し、次第にそれが現実化して来た。再び浦本教授の文を引用すると「しかし乍ら時代の趨勢と共に第13回大会（註 昭和9年）以来会則を定め、会員制度の学会となった。とは言え、それによって従来の形態が変わったのではなく依

然として会長は開催校の当番幹事に依って代行せらるる方式であり、他の多くの学会における如き、宿題報告の如きものは行なわれない。下表にみられるように年々大会発表数が増し、事務連絡その他必要な事項も生じ、友好的な集まりとしては巨大化してきたことも組織づくりの気運促進の一因であらう。

日本生理学会大会一覧表（\*日本医学会の分科会）

回	開催年月	開催地	主催校	当番幹事	演題数
第1回	大11. 7	東京	東大	永井 潜, 橋田邦彦	37
第2回	大12. 4	福岡	九大	石原 誠, 板垣政参	75
第3回	大13. 7	仙台	東北大	藤田敏彦, 佐武安太郎	107
第4回	大14. 8	奉天	満州医大	久野 寧	104
第5回*	大15. 4	東京	東大	永井 潜, 橋田邦彦	82
第6回	昭 2. 4	岡山	岡山医大	生沼曹六	142
第7回	昭 3. 4	京都	京大	石川日出鶴丸, 正路倫之助	140(デモ 8)
第8回	昭 4. 7	札幌	北大	宮崎彪之助, 朴沢 進	121
第9回*	昭 5. 4	大阪	阪大	中川知一	116
第10回	昭 6. 3	長崎	長崎医大	緒方大象	136
第11回	昭 7. 3	新潟	新潟医大	横田武三	103
第12回	昭 8. 7	金沢	金沢医大	上野一晴	206
第13回*	昭 9. 4	東京	慈恵医大	浦本政三郎	159(紙上 30) デモ 5)
第14回	昭10. 10	京城	京城大	中西政周, 大塚藤吉	302(紙上191)
第15回	昭11. 10	倉敷	労研	陣峻義等	211
第16回	昭12. 4	名古屋	名古屋医大	福田邦三	154
第17回*	昭13. 4	京都	京大	石川, 久野, 越智, 正路, 勝	222
第18回	昭14. 4	熊本	熊本医大	小玉作治	195
第19回	昭15. 4	千葉	千葉医大	鈴木正夫	119
第20回	昭16. 7	台北	台北大	細谷雄二, 竹中繁雄	119(紙上 56)
第21回*	昭17. 3	東京	慶大	加藤元一	138
第22回	昭18. 3	福岡	九大	板垣政参, 緒方大象	165
休 会	昭19.				
休 会	昭20.				
第23回	昭21. 11	仙台	東北大	佐武安太郎, 本川弘一	42
第24回*	昭22. 4	大阪	阪大	久保秀雄	101
第25回	昭23. 5	新潟	新潟大	高木健太郎	180
第26回	昭24. 4	京都	京大	笹川久吾, 大谷卓三	193(紙上 71)
第27回	昭25. 5	呉	広島医大	西丸和義	346
第28回*	昭26. 4	東京	東大	坂本嶋嶺, 福田邦三	337
第29回	昭27. 7	札幌	北大	箕島 高	388(紙上285)
第30回	昭28. 4	福岡	九大	瀬尾愛三郎	397(紙上309)
第31回	昭29. 5	名古屋	名大	久野 寧, 伊藤 龍	233
第32回*	昭30. 4	京都	京大	笹川久吾, 大谷卓造	324(紙上240)
第33回	昭31. 5	岡山	岡山医大	林 香苗, 福原 武	234
第34回	昭32. 5	神戸	神戸医大	正路倫之助, 須田 勇, 古沢一夫	369

回	開催年月	開催地	主催校	当番幹事	演題数
第35回	昭33. 5	金沢	金沢大	斎藤幸一郎, 岩間吉也	388
第36回*	昭34. 3	東京	日本医大	戸塚武彦	252(デモ 5)
第37回	昭35. 4	徳島	徳島大	岡 芳包, 山野俊雄	292
第38回	昭36. 4	京都	京都府立医大	吉村寿人, 岩瀬善彦	202(デモ 5)
第39回	昭37. 7	弘前	弘前大	佐藤 熙, 中村 勉	253(紙上 31)
第40回*	昭38. 4	大阪	阪大	久保秀雄, 吉井直三郎	146
第41回	昭39. 4	千葉	千葉大	鈴木正夫, 福田篤郎	169(デモ 9)
第42回	昭40. 5	岐阜	岐阜大	竹中繁雄, 田村喜弘	249(デモ 2)
第43回	昭41. 5	松本	信州大	和合卯太郎, 宮川 清	275(デモ 3)
第44回*	昭42. 3	名古屋	名大	伊藤 龍, 高木健太郎	277(デモ 2)
第45回	昭43. 4	熊本	熊本大	緒方維弘, 佐藤昌康, 田中育郎	360(デモ 2)
第46回	昭44. 4	米子	鳥取大	山田 守, 及川俊彦	288(デモ 2)
第47回	昭45. 4	東京	昭和大	井上清恒, 市河三太, 武重千冬	278(デモ 3)
第48回*	昭46. 4	東京	東京医歯大	勝木保次, 市岡正道, 村田計一, 渡辺昭	281
第49回	昭47. 5	盛岡	岩手医大	三田俊定, 八木舎四, 高下弘夫	365(デモ 4)
第50回	昭48. 4	福岡	九大	間田直幹, 後藤昌義, 栗山 熙, 桑原万寿太郎	405(デモ 1)
第51回	昭49. 6	札幌	北大	伊藤真次, 藤森開一, 中村治雄	434(特別招待講演2シ)
第52回*	昭50. 4	津	三重大	勝田 稔, 村上長雄	401(シ)
第53回	昭51. 6	仙台	東北大	鈴木泰三, 青木 健, 中浜 博, 田崎京三, 星 猛	465(シ)
第54回	昭52. 4	鹿児島	鹿児島大	松本保久, 橋村三郎, 笹原泰夫	458(ポ 10)
第55回	昭53. 4	新潟	新潟大	小林庄一, 新島 旭, 丸山直滋,	476(ポ 15)
第56回*	昭54. 4	東京	慈恵医大	島田久八郎, 村上俊樹	460(ポ173シ)
第57回	昭55. 4	神戸	神戸大	増田 允, 酒井敏夫	473(ポ187シ)
第58回	昭56. 4	徳島	徳島大	須田 勇, 岡本彰祐, 塙 功	505(ポ 72シ)
第59回	昭57. 4	東京	慶大	松本淳次, 井上五郎, 高田 允	671(ポ 36)
第60回*	昭58. 4	大阪	阪大	塚田裕三, 村上元彦, 岩間吉也, 中馬一郎, 中山昭雄, 河村洋二郎	657(シ 1) (特別講演1)

注：(ポ：ポスター, シ：シンポジウム) (生理学会事務局調べ)

会員組織のはじめの頃は各大学生理学教室の主任教授と2, 3研究所主任研究員が評議員となったが、具体的には昭和10年(1935), 京城における評議員会で生理学会の改組充実案が提出され、会則を定め、会員制とし、機関雑誌発行の案が承認された。橋田邦彦教授、浦本政三郎教授と戸塚武彦教授が常任幹事を依頼され、事務局を東大生理学教室におき、機関雑誌発行も三常任幹事に委された。なお機関雑誌発行までの歩みの一端を浦本教授の文より引用すると、「一般の学会は機関雑誌を有するのが普通である。しかるに大日本生理学会は創立14年におよび、毎年会員によって発表せらるる業績は恐らく300篇に達するであろうが、まだ機関雑誌の編集を見ない。一中略一 素よりこれには一方には邦文にするか、欧文にするかの問題があ

り、邦文とすればまだ術語も一定せざる状態にあり、刊行する以上は日本生理学の機関誌として充分権威あるものすなわち精練されたる業績を望むという慎重派があり、他方研究に燃えつつある学徒は、機関雑誌がないという事が学会の権威に拘わると考えて居る状態である。しかし、この機関雑誌創刊の件は両3年来、学会毎に評議員会の議題に上りつつあり、若き学徒はその推進機関として昨年「生理学雑談会」なるものを作り、その会の機関雑誌「余外集」なるものを刊行して居る。」  
 この文でも見られるように学会機関雑誌発行に対しては東京生理学雑談会の役割を見逃がせない。昭和9年(1934)5月、第1回の雑談会が開かれ、学術講演などとともに懇談がおこなわれ、とくに生理学雑誌刊行準備の意見、例えば

昭和11年(1936)7月末日現在の会員名簿では会員数が464名、評議員数が39名であり、評議員には各大学と2, 3専門学校の教授ならびに倉敷労研所長が委嘱されている。

昭和12年(1937)8月1日現在の名簿では会員数が増加し、評議員が66名に増員され各大学の助教授、講師が加わっている。

常任幹事は当初は橋田、浦本、戸塚の三教授であったが、間もなく久野 寧教授が加わって4名常任幹事制をひいていた。

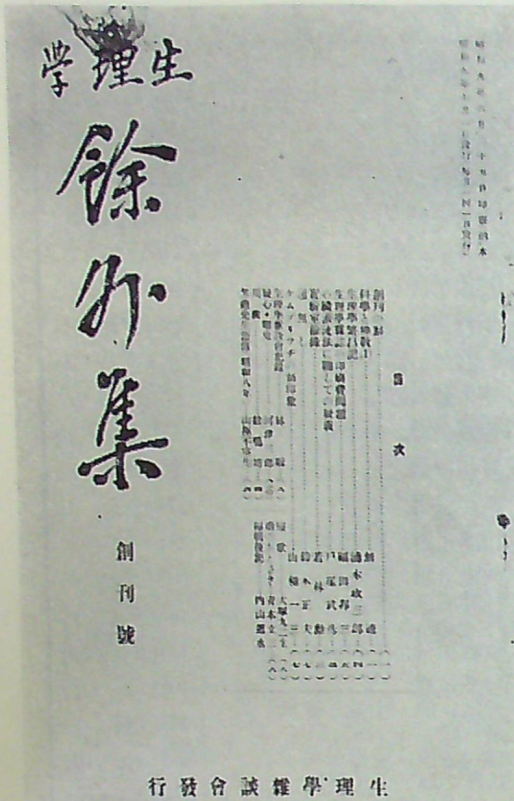
昭和11年(1936)10月、倉敷で行なわれた第15回大会の評議員会の懇談の一部を引用すると、大日本生理学組織充実に関する件

a. 会員組織となりたるも、いま暫く従前どおり自由な組織で進むこと、会長など置くことをせず、その代りに対外的に会長の名儀の必要ありたる時は橋田教授の名を用いることとする。地方的に「部会」(例えば大阪部会、九州部会の如く)を起し、大日本生理学が部会として学会を開催してもよい。部会の記事は生理学雑誌に掲載する。

生理学術語に関する件  
術語撰定委員を設けること、委員の撰定は橋田常任幹事に一任すること。  
などの記事がある。

地方部会の問題は、第14回大会では多数の演題(191題)が紙上発表となり、また、第15回大会でも出題多数(211題)のために一会場で賅えず、紙上発表を避けるために5分科会にわけておこない、各分科毎に総括報告者を依頼したことが直接のきっかけになっている。このような多数会場を使用した大会の在り方は今日でも問題があり、その解決を見ていないが、その一つの解決策として地方部会の報告を大会の報告とある意味で同一視して、演題多数問題の一部緩和をはかったところであろう。

地方部会の件は公式には第18回大会時に決定している。  
また生理学用語の問題は先に引用した浦本教授の文の中にも出てくるが、生理学雑誌を発行した以上一日も早く用語選定をしなければなら



雑誌印刷費問題などが提出され、生理学外集には当時の若手研究者が中心になって活発な意見を開陳している。

日本生理学雑誌発行以前に大正15年(1926)から橋田邦彦教授が編集した Journal of Biophysics が刊行された。これが当時の生理学会にとっては機関誌の役を演じ、学会報告の要旨の欧文訳が掲載された。2巻で終わったが、その後は文部省学術会議によって編集された Japanese Journal of Medical Science, Biophysics に、継続掲載されたので学会報告の一応の対外紹介は行なわれていた。

3. 学会組織づくりから終戦時まで

第14回大会で機関誌発行と大日本生理学々則の大綱が承認されたので、会則と雑誌規定、投稿規定を成文化するために昭和10年(1935)末に橋田、浦本、戸塚三常任幹事の名で別掲の会則案規定が学会員に図られ、この会則と規定がその後の運営の拠り処となった。

日本生理学雑誌の生れまで

戸塚 武 彦

吾々の生理学雑誌と云ふものは、橋田邦彦先生の苦心のたまひである。先生は、大正15年(1926)から、Journal of Biophysics を編集された。これは、当時の生理学会にとつては、機関誌の役を演じ、学会報告の要旨の欧文訳が掲載された。2巻で終わったが、その後は文部省学術会議によって編集された Japanese Journal of Medical Science, Biophysics に、継続掲載されたので学会報告の一応の対外紹介は行なわれていた。

大日本生理学々則草案  
橋田 邦彦  
浦本 三郎  
戸塚 武彦

1. 本学会は、大日本生理学々則を以て、その宗旨とする。2. 本学会は、生理学の発展を期し、その研究の促進を期す。3. 本学会は、生理学の普及を期し、その教育の促進を期す。4. 本学会は、生理学の国際的交際の促進を期す。5. 本学会は、生理学の発展を期し、その研究の促進を期す。6. 本学会は、生理学の普及を期し、その教育の促進を期す。7. 本学会は、生理学の国際的交際の促進を期す。8. 本学会は、生理学の発展を期し、その研究の促進を期す。9. 本学会は、生理学の普及を期し、その教育の促進を期す。10. 本学会は、生理学の国際的交際の促進を期す。

単位記号の統一  
例) 1) 長さ: cm, m, mm, μm (μに非ず) 2) 重量: Kg, g, mg, 3) 時間: h, m, s, ms (1/10に非ず) 4) 面積: l, cc, ml, mm<sup>2</sup> 5) 面積: m<sup>2</sup>, cm<sup>2</sup>, mm<sup>2</sup> 6) 体積: m<sup>3</sup>, cm<sup>3</sup>, mm<sup>3</sup> 7) 温度: °C, °F (°Fに非ず) 8) 圧力: mmHg, cmHg, Torr (Torrに非ず) 9) 電圧: V, mV, μV (μVに非ず) 10) 電流: A, mA, μA (μAに非ず) 11) 電力: W, mW, μW (μWに非ず) 12) 熱量: cal, kcal, J, kJ (Jに非ず) 13) 功: J, kJ (Jに非ず) 14) 仕事率: W, kW (Wに非ず) 15) 運動速度: cm/s, m/s, mm/s (mm/sに非ず) 16) 加速度: cm/s<sup>2</sup>, m/s<sup>2</sup>, mm/s<sup>2</sup> (mm/s<sup>2</sup>に非ず) 17) 角速度: rad/s, deg/s (deg/sに非ず) 18) 角加速度: rad/s<sup>2</sup>, deg/s<sup>2</sup> (deg/s<sup>2</sup>に非ず) 19) 力矩: Nm, cmg (cmgに非ず) 20) 力: N, kg, gf (gfに非ず) 21) 仕事: J, kcal (Jに非ず) 22) 仕事率: W, kcal/min (kcal/minに非ず) 23) 熱容量: cal/g, kcal/kg (kcal/kgに非ず) 24) 比熱: cal/g°C, kcal/kg°C (kcal/kg°Cに非ず) 25) 熱伝導率: cal/cm°C, kcal/cm°C (kcal/cm°Cに非ず) 26) 熱伝導率: W/m°C, kcal/m°C (kcal/m°Cに非ず) 27) 熱伝導率: W/cm°C, kcal/cm°C (kcal/cm°Cに非ず) 28) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 29) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 30) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 31) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 32) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 33) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 34) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 35) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 36) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 37) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 38) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 39) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 40) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 41) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 42) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 43) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 44) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 45) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 46) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 47) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 48) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 49) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 50) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 51) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 52) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 53) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 54) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 55) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 56) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 57) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 58) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 59) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 60) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 61) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 62) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 63) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 64) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 65) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 66) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 67) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 68) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 69) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 70) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 71) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 72) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 73) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 74) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 75) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 76) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 77) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 78) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 79) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 80) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 81) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 82) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 83) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 84) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 85) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 86) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 87) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 88) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 89) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 90) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 91) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 92) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 93) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 94) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 95) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 96) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 97) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 98) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 99) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 100) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 101) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 102) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 103) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 104) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 105) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 106) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 107) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 108) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 109) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 110) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 111) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 112) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 113) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 114) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 115) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 116) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 117) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 118) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 119) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 120) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 121) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 122) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 123) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 124) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 125) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 126) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 127) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 128) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 129) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 130) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 131) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 132) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 133) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 134) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 135) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 136) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 137) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 138) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 139) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 140) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 141) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 142) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 143) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 144) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 145) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 146) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 147) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 148) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 149) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 150) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 151) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 152) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 153) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 154) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 155) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 156) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 157) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 158) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 159) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 160) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 161) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 162) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 163) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 164) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 165) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 166) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 167) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 168) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 169) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 170) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 171) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 172) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 173) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 174) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 175) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 176) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 177) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 178) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 179) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 180) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 181) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 182) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 183) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 184) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 185) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 186) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 187) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 188) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 189) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 190) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 191) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 192) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 193) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 194) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 195) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 196) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 197) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 198) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 199) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 200) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 201) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 202) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 203) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 204) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 205) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 206) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 207) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 208) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 209) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 210) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 211) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 212) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 213) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 214) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 215) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 216) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 217) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 218) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m<sup>2</sup>°Cに非ず) 219) 熱伝導率: W/cm<sup>2</sup>°C, kcal/cm<sup>2</sup>°C (kcal/cm<sup>2</sup>°Cに非ず) 220) 熱伝導率: W/m<sup>2</sup>°C, kcal/m<sup>2</sup>°C (kcal/m

ないということで、橋田邦彦教授が委員長となつて日本生理学雑誌第3巻昭和13年(1938)に生理学術用語彙として附録された。生理学用語に関しては、その後、戸塚武彦教授が委員長となり充足改訂をはかり戦後に引き継いだ。なお橋田教授による語彙の稿本は昭和10年につくられ、これが生理学用語集のはじめになる。

生理学会の大会は毎年多数の出題があり順調に進んでいたが、昭和18年(1943)3月、九大で第22回大会を行ない、次回を東北大学生理学教室と決定して以来、戦争状態が苛烈となったため、大会が中断され、再会されたのは昭和21年(1946)11月、東北大学でおこなわれた第23回大会であった。なお日本生理学会は日本医学会においても第7回総会時大正15年(1926)4月に独立して第2分科会となった。また、第9回日本医学会総会昭和9年(1934)4月において医学史が新たに分科会となり、生理学は第3分科会となり、今日に至っている。

上記のように昭和14年(1939)から生理学地方部会が公式のものとなり、その抄録が日本生理学雑誌に掲載されるようになったが、実際化されたのは昭和14年12月東大で開かれた生理学会学術小講演会である。この小講演会も昭和17年(1942)11月に東北大学で行なったものを境として中断された。

日本生理学雑誌の発行は橋田、浦本、戸塚三教授に委任されたが、編集の実際に当たったのは戸塚武彦教授で雑誌発行に文字どおり尽力された。

掲載論文のことは省略するが、出発後数年を経ずして日本が戦時状態になり、はじめは印刷紙にクリームアートを用いていたが、次第にザラ紙まで落ちた。昭和19年(1944)はすでに戦争状態が苛烈になり、大会も延期のやむなきに至ったが、原著論文の掲載を昭和19年12月まで続けられた(第9巻は11号で終わっている)。そして昭和20年(1945)を休刊しただけで、昭和21年には山形県の印刷所をつかって再刊された。なお、昭和19年には印刷事情その他から林 謙教授が編集していた条件反射を合併することにな

り、第9巻7号(昭和19年7月)から編集幹事が浦本、久保、坂本、鈴木、戸塚、林、福田の各教授になった。

また、日本生理学雑誌を産み出した生理学雑誌会は昭和12年(1937)7月に開かれた第14回会合で終わり、生理学余外集も昭和12年に終わった。

# 生理学試道集

一、	石原 謙	四月 二
二、	火野 龍雄	四月 三
三、	日本の生理学	四月 四
四、	戸塚武彦の生理学	四月 五
五、	戸塚武彦の生理学	四月 六
六、	戸塚武彦の生理学	四月 七
七、	戸塚武彦の生理学	四月 八
八、	戸塚武彦の生理学	四月 九
九、	戸塚武彦の生理学	四月 十
十、	戸塚武彦の生理学	四月 十一
十一、	戸塚武彦の生理学	四月 十二
十二、	戸塚武彦の生理学	四月 十三
十三、	戸塚武彦の生理学	四月 十四
十四、	戸塚武彦の生理学	四月 十五
十五、	戸塚武彦の生理学	四月 十六
十六、	戸塚武彦の生理学	四月 十七
十七、	戸塚武彦の生理学	四月 十八
十八、	戸塚武彦の生理学	四月 十九
十九、	戸塚武彦の生理学	四月 二十
二十、	戸塚武彦の生理学	四月 二十一
二十一、	戸塚武彦の生理学	四月 二十二
二十二、	戸塚武彦の生理学	四月 二十三
二十三、	戸塚武彦の生理学	四月 二十四
二十四、	戸塚武彦の生理学	四月 二十五
二十五、	戸塚武彦の生理学	四月 二十六
二十六、	戸塚武彦の生理学	四月 二十七
二十七、	戸塚武彦の生理学	四月 二十八
二十八、	戸塚武彦の生理学	四月 二十九
二十九、	戸塚武彦の生理学	四月 三十
三十、	戸塚武彦の生理学	四月 三十一

昭和十四年三月廿五日印刷  
昭和十四年三月廿七日發行  
生理学会余外集改題 第四巻 第一號

が、これは生理学試道集として引き継がれた。昭和14年(1939)のはじめ頃に生理学の談話会をつくる案が出され、5月の会で生理学東京談話会という名称をきめ、生理学会大会と丁度始った地方部会の月を除いて毎月関連領域を含めて適当と思われる演者を依頼して話し合う機会をつくることになった。この会の機関誌が生理学試道集であるが、これが日本生理学評論へ結びついた。日本生理学評論は当時の日本生理学雑誌が原著論文と学会抄録のみを掲載していたのに鑑み、Physiological review, Annual reviewのように総説掲載の和文雑誌をつくることを主眼とした。浦本政三郎教授が編集者となって生理学東京談話会を発行所にして昭和16年(1941)2月に第1巻1号を発行した。第2巻を終った

ところで戦時状態のために廃刊になった。

日本生理学評論に第1回大日本生理学会大会から第14回大会までの演題が掲載されている。

## 4. 大会再開から新制大学院移行期まで

昭和21年(1946)11月21, 22日、第23回生理学会大会が東北大学で再開されたのが新たな出発になる。

この時期から日本の医学教育制度が改変され、帝国の名称の廃絶とともに年を追って旧制帝国大学、官公私立の医科大学、医学専門学校が新制度の大学になった。

昭和19年(1944)に医師の増加を目的として、全国各地に医学専門学校がつけられ、既存の大学にも専門部が併置された。終戦後それらは存続するものと廃校するものにわけられ、存続するものは4年制から5年制となり、昭和21年(1946)8月の閣議決定によって、それまでは大

# 日本生理学評論

責任編輯者  
浦本政三郎

編輯顧問

生沼曹六 石川日出鶴丸 藤田敏彦  
橋田邦彦 板垣政彦 久野寧  
佐武安太郎 田中肥後太郎 正路倫之助

総説協力委員

福田邦三(東京) 小玉作治(熊本)  
大谷卓造(京都) 上野一晴(金沢)  
瀬尾愛三郎(福岡) 戸塚武彦(東京)  
本川弘一(仙台) 鈴木正夫(千葉)  
久保秀雄(大阪) 勝義孝(京都)  
渡島高(札幌) 古澤一夫(東京)  
細谷雄二(東京) 林 謙(東京)  
大塚藤吉(京都) 西丸和義(東京)  
石川知福(東京) 杉本良一(東京)

第1巻 第1號

昭和16年2月11日發行

生理学東京談話會

發賣所 岩波書店

日本生理学評論第一巻目次

## 日本生理学評論第一巻目次

総説・展望・総括報告・論説・研究資料

創刊の辭及試道頁に就て

論説	浦本政三郎	生理学的世界像	1
展望	小玉作治	組織培養に関する最近一年間の研究業績から	16
展望	鈴木正夫	1949年に於ける刺戟生理学	29
展望	越智真造	内分泌及びホルモンに関する最近の思潮	40
展望	正路倫之助	1949年に於ける本邦呼吸生理学の展望	48
展望	久保秀雄	生理学に於ける酸化還元電位の展開	52
展望	本川弘一	生物電気学の最近の趨勢	67
論説	名取健二	骨筋の力學的機構に就て	87
総説	森 信風	人工放射能性物質とその生物学的利用に就て	100
総説	青木晋四郎	Wedensky 制止現象に就ての総説	142
展望	加藤七三	1949年の日本生化学の展望	177
総括報告	横山忠雄	家鼠の血液循環に就て	185
研究資料	浦本政三郎	日本生理学会20週年記念業績資料編纂(其1)	193
総括報告	久野 寧	人體發汗器官の熱帯風土馴化	205
総括報告	板垣政彦	血液の機能に関する研究	278
総説	森下 宛一	破傷風毒素の骨筋に及ぼす影響に就ての総説	286
総説	奥 甘 守	骨筋の短縮率に就て	299
研究資料	浦本政三郎	日本生理学会20週年記念業績資料編纂(其2)	313
総括報告	浦本政三郎	筋短縮機構に就て(1)	333
総説	土橋英夫	應感型に関する総説	341
総説	上岡文雄	疲労測定に関する総説	356
原著	松山 龍一	體力に関する研究(其一)。動的體力示標に就て	360

日本生理学評論第一巻目次

研究資料 浦本政三郎 日本生理学会20週年記念業績資料編纂(其3).....424

## 試道集

杉本良一	: Journal of neurophysiologyの紹介	1
第20回大日本生理学会總會案内、第16回及第17回生理学東京談話會記録		3
第19回例會談話抄、第3回日本生理学会小講演會演題、第20回本會例會懇愛		6
第2回生理学小講演會概況		13
第21回生理学東京談話會談話稿録		13
第21回生理学東京談話會記録		16
第22回生理学東京談話會記録		16
第20回大日本生理学会概況		18
第24回生理学東京談話會記録		19
第25回生理学東京談話會記録		20
第26回生理学東京談話會記録		20
第4回大日本生理学会小講演會演題		20
第4回大日本生理学会小講演會概況		22

日本生理學評論第二巻目次

総説・総括報告・原著・研究資料

加藤元一：単一神経纖維生体膜阻と其応用……………1  
 栗田桂太：植物生理学に於ける一二の問題に就て……………18  
 杉本良一：筋輸機構に就て(其二)……………31  
 浦本政三郎：日本生理学会週年記念業績資料編纂……………31  
 東龍太郎：子宮筋に関する薬理學並に生理學的研究……………47  
 正路倫之助：日本人の耐寒に関する生理學的研究……………59  
 阿部勝馬：體温調節に関する生理學的並に生理學的研究……………69  
 佐武安太郎：アドレナリン分泌の生理學的研究……………96  
 鈴木正夫：電気刺激に於ける強制要素の研究……………113  
 林孝實：日本薬理學史の展覧……………120  
 浦本政三郎：日本生理學史の展覧……………134  
 浦本政三郎：日本生理学会週年記念業績資料編纂(其五)……………147  
 阿部裕吉：筋活動時の化学過程に就ての総説……………155  
 仁木唐次郎：骨髄質の二次性現象に就ての総説……………175  
 奥甘守：緊張筋に非緊張筋に就て……………190  
 奥甘守：滑平筋に及ぼす温度の影響に就て……………202  
 土橋義雄：早視反響時に就ての総説……………211  
 高橋英雄：腸胃腸管内の乳酸に就ての総説……………217  
 川上池上佐々木：感應現象に就て……………229  
 矢崎芳夫：生物発光に就て……………253  
 朝井清：動物體原質に関する総説……………269  
 秋元新平：骨髄筋収縮時の皮層析性の變化に就て……………293  
 古川誠：Chininの筋に対する作用……………317  
 緒方勇士郎：高壓環境の循環等に対する影響……………327  
 松山龍一：8才より29才に至る日本人の體力……………339

学，専門学校卒業後申請によって与えられていた医師免許証が卒業後1年間の実地診療（インターン）を終了した後，医師国家試験に及第した後に授与される方式に変えられた。この制度変更はその後の基礎医学志望者の動向に大きな影響を与えた。昭和22年6月頃から医学専門学校が逐次医科大学に切り変わったが，はじめは旧制ついて新制の大学になった。私立大学の場合は昭和24年(1949)12月，公布の私立学校法により，それぞれ学校法人になった。このような変革期において新たに医科大学となったものを加えて大学医学部，医科大学の数は45校になり，さらに旧帝国大学医学部を除いて単講座制であった医科大学の中で2講座制に移るものがあり生理学担当教授も増員された。

日本生理学会はこのような状況下に組織運営面で変革がみられ，会の発展につれて，各種委員会の設置，会則の部分改訂などがおこなわれるようになった。

鈴木泰助：満4才より7才迄の日本兒童の體力……………349  
 鈴木泰助：30才より60才に至る日本人の體力……………357  
 大塚廣吉：腹意設置法と家兎卵巣の生理學的研究……………369  
 大塚廣吉：家兎の卵管及び子宮運動の研究……………387  
 堀口正史：筋乳酸に関する総説……………403

試述欄

第27回生理學東京談話會記録……………1  
 第28回生理學東京談話會記録……………1  
 第29回生理學東京談話會記録……………3  
 第30回生理學東京談話會記録……………3  
 第31回生理學東京談話會記録……………4  
 第7回総説會記録……………4

第23回大会時にはまだ大日本生理学会の名が用いられたが，新たな情勢に対応する上で常任幹事が従来の6名から12名に増員された。

昭和23年(1948)に大日本生理学会は日本生理学会と改名した。第27回大会(昭和25年)の評議員会で欧文の生理学雑誌刊行の議がおこり，久野寧委員長の下で発刊が準備されることになり，また生理学教授推薦委員会が設けられ，さらに学会監修による生理学全書刊行の提案がされた。生理学大学教授推薦委員会は12名構成で毎年半数交代制を採用，3名の詮衡委員を互選することになった。この方式は昭和33年(1958)に改められ推薦委員を3名にした。

欧文雑誌は Japanese Journal of Physiology として久野寧教授が主監となって昭和25年(1950)6月から刊行がはじまり，購読料は生理学学会会員は1,000円，教室・図書館などの団体購読は2,000円と申合せた。なお，生理学会の評議員は J. J. P. を購入することが申合されて

いた。

また生理学全書は日本生理学会編集生理学講座の名の下に中山書店より昭和25年より逐次刊行された。

第27回大会 昭和25年(1950)5月の評議員会で文部省科学研究費配分審議委員候補者推薦，学士院会員候補者推薦が審議され，また学士院賞受賞論文，著書推薦委員会がつくられた。この委員会は10名で構成された。

第28回大会 昭和26年(1951)4月の評議員会で常任幹事が再び6名に減員され，在京者が選出された。この評議員会において久野教授の提案によって国際生理科学連合 (International Union of Physiological Sciences) の加盟団体として日本生理科学連合 (Japanese Union of Physiological Sciences) の設置が決定され，毎年秋期に講演会を開くことになった。

第29回大会 昭和27年(1952)7月において評議員会へ提出する議案の中で時間を要する案件を前もって評議するために代議員制をとることになり，全国から17名が選ばれた。この方式は第30回大会時にも踏襲されて代議員が選出されているが，第31回で常任幹事を全国制に選出することになったときに廃止された。

第30回大会 昭和28年(1953)3月で評議員の推薦を生理学教授候補者推薦委員会に附託した。この方式は今日まで続いている。また，緒方大象，越智真逸氏を特別会員に推薦することになり，その後，特別会員推薦が生理教授候補者推薦委員会で協議されるようになり，70才を越える学会の長老を特別会員に推薦する慣例になった。また，この大会で学術会議会員候補者の推薦の問題が協議され，日本生理学会会員が立候補して学会推薦を求めた場合には常任幹事会に附議して決定することになった。この方式は今日まで続いている。

第31回大会 昭和29年(1954)5月の評議員会で常任幹事を在京地区だけでなく全国的に選ぶ議が提出され，在京6名に加えて全国から14名の幹事を選出することになった。その人数割は北海道(2)，東北(2)，関東新潟(2)，中部(2)，近畿(2)，

中国・四国(2)，九州(2)であった。この人数割は次年度に一部変更され，北海道(1)，近畿(4)になり，さらに多少変更されて今日に至っている。

また，第21回国際生理学会を日本に招致する件が提案され，常任幹事会で委員を選出することになった。この委員は久野教授に一任され第32回大会 昭和30年(1955)4月で指名された。

第33回大会 昭和31年(1956)5月において第21回国際生理学会日本招致が評議員会の重要論議となり投票の結果，招致を見合わせるようになった。しかし，この評議がその後の国際生理学会日本招致の芽生えになり，昭和40年(1965)9月第23回国際生理学会(後述)を東京で開催する道へ進んだ。

生理学会大会の講演数は，毎年多数の演題が提出され分科会方式を取らざるをえなかったが，戦後地方部会は談話会の名を用いるようになり，生理学東京談話会も昭和23年(1948)9月56回会合から会員の学術報告の集會に姿を変え，昭和24年(1949)9月に生理学札幌談話会，同24年10月に中国四国談話会，同24年11月に生理学九州談話会，同25年10月に近畿生理学談話会がつくられた。その講演抄録は地方小学会報として日本生理学雑誌第12巻から掲載され，今日におよんでいる。なお，地方小学会の呼び名は1~2変更され，昭和26年(1951)より北海道地方会，昭和29年(1954)より西日本生理学会の名が用いられている。また，昭和46年(1971)4月から東北生理学談話会がはじまった。

日本生理学雑誌は原著論文のみを掲載していたが，第15巻昭和28年(1953)から総説掲載がはじまり，また第17巻昭和30年(1955)から生理学論文表題集を掲載するようになった。これらも今日まで続いている。

また，生理学の用語については昭和18年(1943)，第11回日本医学会の附帯事業として医学用語整理委員会がつくれ，戸塚教授が委員として，その第一次選定に当たったが，この第1版が昭和19年7月南山堂から刊行された。戦後生理学会としての用語委員会が再会され，従来ドイツ語を主として撰んだものを英語，ドイツ

語両方を採用することになり、戸塚教授が委員長となって日本生理学会編の生理学用語集がつくられた(昭和35年5月発行 南山堂)。

#### 5. 新制大学院設置から今日まで

昭和30年(1955)から、国立大学は新制の大学院を設置し、私立大学は昭和31年から新制の大学院医学研究科へ移行した。旧制による学位授与は昭和36年(1961)3月までで打ち切られることになり、生理学教室研究員の様相が変化してきた。とくに新制大学院では各大学がすべて生理学を2講座にしたので、生理学教授の数が急増し、新しい時代に入ったことが留意される。しかし、他方では医学部出身者の基礎医学志望数が急減し、新たな問題が生じてきた。

第35回大会 昭和33年(1958)5月ではそれらの状況を背景にして、生理学振興が呼びかけられ、また学生実習の改善の問題が提案された。それぞれ内山孝一、本川弘一教授を委員長として委員会がつくられ、その後の各種委員会設置とその活発な活動の口火になった。なお、この大会で日本生理学の歴史編集の案が出され、浦本政三郎教授が委員長となり、教室史、業績史などの編集がはじまった。この委員会はその後内山孝一教授(昭和41年より)、名取礼二教授(昭和47年より)に委員長が交代し今日に至り、継続編集に当たっている。

第37回大会 昭和35年(1960)4月に時代の趨勢に対応して、従来ほとんど改訂をみなかった日本生理学会会則が下記のように書き換えられた。しかし、この会則でも基本的な立ち場は変わっていない。

#### 日本生理学会会則

1. 本会は日本生理学会と称する。
2. 本会は生理学の進歩発展をはかるのを目的とする。
3. 本会は毎年1回大会を開いて会員の業績を公表討議し、総会および評議員会を開いて会務を評議する。  
大会の開催は前もって全会員に通知し演

題を募集する。なお会員は各所在地において適宜地方部会をつくり、業績を公表討議することができる。

4. 本会は会員の原著、大会および地方部会の講演抄録を公表するため機関誌邦文の日本生理学雑誌、欧文の Japanese Journal of Physiology を発行する。

5. 会員は、本会の趣旨に賛成する同学者で評議員の紹介あるものに限る。会員は年額1,000円の会費を負担し、学会および機関誌に業績を公表することができる。

また日本生理学雑誌の頒布を受ける。

学校、図書館、研究所などの団体は準会員として年額1,000円の購読料を前納し、会誌の頒布のみを受ける。特別会員は多年本会に功労のあった会員で評議員会から推薦され総会の賛同によって定められる。特別会員の会費は免除される。

6. 本会の役員には評議員、常任幹事、当番幹事がある。

7. 評議員は本会の中核となる会員であって、評議員の推薦により選考委員会を経て評議員会に附議して決定される。

評議員会は毎年大会の際開催され本会に必要な事項を評議する。

評議員会は地区別に定数の常任幹事を選出し、日常および緊急の会務を委嘱する。

8. 常任幹事の中に庶務・会計・編集等幹事を置く。

9. 当番幹事は大会の開催を引受けた評議員であって、大会の一切の事務を行う。大会終了後次回当番幹事に事務引継を行って任期を終る。この任期中は常任幹事会の一員に加わる。

当番幹事は大会開催中常任幹事会・評議員会および総会を招集しこれを司会する。

10. 常任幹事会は必要に応じて各種の専門委員会を設け委員を委嘱することがある。必要に応じてその委員は常任幹事会に出席し専門事項の審議に参加する。

11. 本会の会計年度は毎年1月に始まり12月

に終る。

12. 本会の事務報告は総会および日本生理学雑誌に発表する。

13. 本会の事務所は東京大学医学部生理学教室内に置く。

14. 本会則を変更するには評議員会の決議を経て総会の承認を得なければならない。

#### 附 則

常任幹事に関する事項

全国を8地区に分け各地区の評議員の互選によって常任幹事を定める。地区およびその定員は下表による。任期は3カ年とし重任を妨げない。選挙の際評議員会は地区毎に2名の選挙管理委員を設け選挙事務を依嘱する。選挙の結果は日本生理学雑誌上に報告する。

幹事の選出区分	定員(計21名)
北海道地区	1名
東北地区	2名
関東地区(新潟を含む東京を除く)	2名
東京地区	6名
中部地区(金沢を含む)	2名
近畿地区(神戸を含む)	4名
中国・四国地区	2名
九州地区	2名

#### 内 規

1) 評議員選考基準：多年本会会員として在籍し相当の生理科学の業績発表があり、満5年以上の研究歴があるもので本会評議員の推薦がなければならない。

2) 評議員は The Japanese Journal of Physiology を購読するものとする。

3) 会費滞納の会員は会員の資格が自然消滅する。

その後会則についてはその運用上いくつかの不便があるため基本的に改訂する意見が出され、昭和44年(1969)5月、時実庶務幹事より全評議員に対して問合せがなされた結果に基づいて会則検討委員会をつくり、時実利彦委員長他9名の委員を依嘱した。この委員会は第48回大会昭和46年(1971)4月で改訂案作製に移り、昭和

46年6月から本間三郎委員長の下で審議に入った。会則改定についてはその後大会評議員会で討議が行われ、第50回大会において、会則の全面的な改訂を今後譲り、当面の問題として下記のような一部改正をおこなった。

#### 昭和35年改定された日本生理学会会則の条文中昭和48年4月までに変更された条項

13. 本会の事務所は東京都文京区本駒込2-28-21 東洋文庫内におく。

#### 附 則

常任幹事に関する事項

全国8地区に分け各地区の評議員の互選によって常任幹事を定める。地区およびその定員は下表による。任期は3カ年とし重任を妨げない。選挙の際選挙管理委員会を設け選挙事務を委嘱する。選挙の結果は日本生理学雑誌上に報告する。

幹事の選出区分	定員(計25名)
北海道地区	2名
東北地区	2名
関東地区(新潟を含む・東京を除く)	2名
東京地区	8名
中部地区	3名
近畿地区	4名
中国・四国地区	2名
九州地区	2名

#### 内 規

4) 庶務幹事は必要な場合に限り日本生理学会代表と称することができる。

5) 常任幹事会で選ばれた2名の監事が本会の会計を監査する。

6) 本会に次の常置委員会をおく。日本生理学雑誌編集委員会、The Japanese Journal of Physiology 編集委員会、評議員選考委員会。

7) 文部省科学研究費補助金審査委員候補者の選出方法は別に定める。

日本学術会議が基礎科学の発展のため将来計画をつくることを提案したのに対応して、第40

回大会 昭和38年(1963)4月に生理学将来計画の委員会をつくる案が出された。この件は生理学振興委員会の審議に移されたが、第42回大会昭和40年(1965)5月で本川弘一委員長、勝木保次、時実利彦副委員長の下に発足し、第43回大会 昭和41年(1966)5月に委員長が勝木教授に変わり、昭和42年1月にこの委員会から生理学研究所設立案が出された。それによって昭和42年10月学術会議総会に研究所設立案が上程され人体基礎生理学研究所(仮称)として政府勸告案が採択された。このために生理学会に準備委員会が結成され、さらに業務専門委員会がつけられ実際の準備に協力した。昭和43年(1968)5月、学術会議に人体基礎生理学研究所準備委員会がつけられ、本川弘一東北大学学長が準備委員長となり、関連学会より委員が34名選出され、内15名が実行委員になった。内園耕二教授が実行委員長になり、業務専門委員会の精力的な活動によって準備が進められ、昭和45年(1970)12月初代所長候補者として勝木保次教授が選ばれた。最近人体基礎生理学研究所は人体の名を除いたが、なお設立途上にある。

第45回大会 昭和43年(1968)4月で生理学教育委員会がつけられ、藤森聞一教授が委員長となり19名の委員が選ばれた。この委員会は「基礎医学教育懇談会」結成に参加し、教育状況の調査などをおこない、学生実験実習設備などについて大学設備標準の改変の資料をつくったが、昭和44年以降も委員会は継続されることになり高橋 恵教授が委員長となった。この委員会は委員会内規をつくり生理学教育改善をはかることをその任務としている。現委員長は本間 三郎教授である。

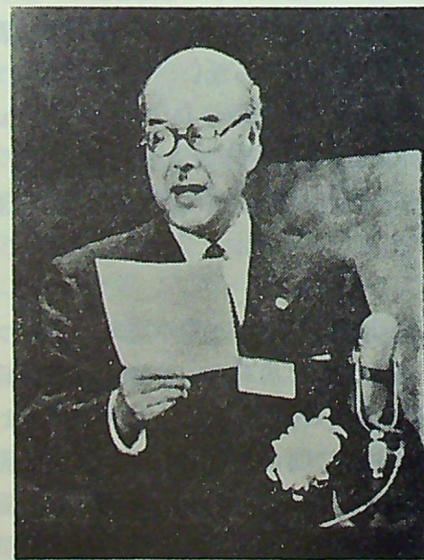
昭和44年(1969)10月、生理学会常任幹事会で従来常任幹事会で推薦していた文部省科学研究費審査委員についてその選出方法を検討することになり、科研費検討委員会がつけられ、佐藤昌康教授がその委員長に選ばれた。第47回大会昭和44年(1969)4月以降科研費審査委員の選出方法その他を立案し(日本生理誌)、科研費配分の状況を日本生理学雑誌に報告している。この

委員会は研究費委員会となり、昭和48年4月委員長が名取礼二教授に交代し、委員は8名で構成されている。

昭和40年(1965)から生理学若手グループの会が発足し、研究集会や将来計画の立案などを推進し、毎大会時にこの会が開かれるようになった。

昭和37年(1962)オランダで開かれた第22回国際生理科学会議において第23回会議を日本が担当することが決まり、昭和38年(1963)に準備のための組織委員会がつけられた。委員会構成は日本生理科学連合に加入している生理学、薬理学、衛生学、動物学、植物学、農芸、内分泌、ビタミンおよび体力の10学会より37名の委員が選ばれ、加藤元一教授が委員長となった。また、組織委員より常任委員14名が選出され、加藤委員長がこの委員会の委員長を兼ねた。組織委員会の幹事として熊谷 洋、林 譚、勝木保次の各教授と学術会議事務局の竹下俊雄氏が選ばれ、プログラム小委員会、記念出版小委員会がつけられた。

昭和38年10月に Congress officer がきめられ、会長に加藤元一、副会長に熊谷 洋、名誉会長に久野 寧の各教授が選出され、また総務は林、庶務は竹下、学務は勝木、財務は熊谷の各幹事が担当することになった。



加藤元一会長



第23回国際生理科学会議で開会の辞を述べる加藤元一会長

学会のプログラム小委員会は松田幸次郎教授が委員長、時実利彦、古村寿人教授が副委員長となり、循環および血液は内山孝一、呼吸は高木健太郎、体温は吉村寿人、消化は福原 武、腎臓および体液は吉村寿人、感覚は間田直幹、筋肉は名取礼二、協関は高木健太郎、薬理学は熊谷 洋、原 三郎、一般細胞生理学は木下治雄、方法は若林 勲、ビタミンは島蘭順雄の各教授が世話人として指名された。記念誌小委員会は内山孝一教授が委員長となり、原 三郎、林 譚、名取礼二、島蘭順雄、木下治雄、若林勲の各教授が指名され Japanese Physiology Present and Past, 1965を刊行した。

第23回国際生理科学会議は昭和40年(1965)9月2日国立教育会館を会場として開会され、9月9日に閉会された。

学会のプログラムは Invited lecture 12, Symposium 12, および Free communication 1208 (国外924, 国内284) であり、参加国47, 参加人員約3,000名であった。この国際学会が日本生理学会発展にとって一つの時期になったものと考えられる。

なお、この国際学会を機会として、別個に

Symposium が企画され、例えば Excitation-contraction coupling に関する会議が、名取礼二、江橋節郎、真島英信、酒井敏夫の各教授が世話人となり昭和40年9月18日箱根において、また肺水腫、肺循環に関する会議が笹本 浩、上田英雄教授司会で昭和40年9月2日東京で開かれた。

日本生理学雑誌の編集は昭和40年(1965)第27巻より内園耕二編集幹事の下で多少編集方針が変更され、在京編集委員とともに地方委員が委嘱され、原著、学会抄録、業績目録、綜説の他に短報欄を設け、生理学振興、実習改善などの提案とともに会報その他が詳細に掲載されるようになった。また、29巻1号昭和42年(1967)より外国文の短報の掲載がはじまった。

第33巻第1・2号昭和46年(1971)2月として、生物リズムについての特集号をつくったが、これで、生理学雑誌は特集、綜説、原著、短報、学会抄録、日本生理学史、生理科学連合講演、論文表題、海外だより、会報、書評、資料などを掲載することになった。

編集幹事は昭和44年(1969)3月より真島英信教授ついで昭和47年(1972)より塚田裕三教授が

選任され、現在に至っている。

昭和43年(1968)に久野 寧 J. J. P. 主幹の要望で J. J. P. の編集、運営を日本生理学会が担当するように準備をすることになり、松田幸次郎教授が委員長となってその方針立案をおこない、答申が出された(日本生理誌 32, 130-136)。それに基づいて J. J. P. は第21巻から日本生理学会の事業として吉村寿人教授が主幹となり、東大出版会から出版されるようになった。現在は勝木保次教授が主幹である。

生理学の用語については第43回大会昭和41年

(1966)8月において委員会の再出発が希望され、時実利彦教授が委員長となり、検討を進め、用語に解説をつける方式で整理し、昭和47年8月生理学用語集(医学書院)を出版した。

なお、日本生理学会の事務局は昭和45年4月より東京大学医学部生理学教室より現在地東京都文京区本駒込2-28-21 東洋文庫内に移った。

昭和48年10月1日現在の会員は2,044名、評議員647名、常任幹事25名である。

(昭和48年11月 記)



## 昭和48年(1973)以後の日本生理学会の歩み

日本生理学教室史編集委員会  
酒井敏夫

第50回日本生理学会大会までの開催地ならびに当番幹事などの一覧は、日生誌 35巻 12号(1973)の日本生理学会50周年記念特集に掲載されている。さらに、第51回より第60回までの分を前一覧表に加えた。大会における発表論文数は年毎に増加の傾向にあり、第59回大会(当番幹事:塚田裕三,村上元彦)においては1研究単位から応募演題数に制限をしない方針をとったので671題にもものぼった。最近の各大会には必ず学術発表の外、生理学教育シンポジウムが開かれていることは特筆される。生理学教育に関連して、第59回大会では教育者向けの解説講演が取り上げられた。また、第54回大会から口演の外ポスター発表が取り入れられ、第56回大会では173題、第57回大会では187題にもなり、ポスター・シンポジウムという形式も採用された。大会抄録は、日生誌の各巻合併号(8・9号)に掲載されてきたが第56回大会以降はこれまでの和英混合からすべて英文となった。

昭和57年(1982)3月現在の会員総数は3,186(一般会員2,914,評議員865,特別会員21,名誉会員1,準会員250)である。

昭和50年(1975)4月には庶務幹事に内園耕二、会計幹事に伊藤正男、編集幹事には塚田裕三の諸幹事が選出され、昭和53年(1978)4月には庶務幹事伊藤正男、会計幹事星 猛がそれぞれ当ることとなり、編集幹事は塚田幹事が引続いてその任についた。その後、昭和56年(1981)4月塚田幹事に代って酒井敏夫幹事が編集幹事に選出された。特別会員として緒方維弘・勝木保次・福原 武(昭和51年4月)、長嶋長節(昭和53年6月)、富田恒男・斎藤幸一郎・松田幸次郎(昭和54年4月)、高木健太郎・吉村寿人(昭和55年3月)、問田直幹・名取礼二・三田俊定・藤森聞一(昭和57年4月)の諸評議員が推薦された。

会則改訂に関する審議は継続されており、昭和48年(1973)4月これまで使われてきた会計監事は会計幹事とまぎらわしいので、今後は会計をとり監事とすることとした。昭和54年(1979)4月、第56回大会において外国人会員に関する件が審議され「会則」中に「名誉会員は、本会に多大の貢献のあった外国人で、評議員会から推薦され総会の賛同によって定められる。名誉会員の会費は免除される」を入れることとなった。昭和57年(1982)3月、第59回大会では原則の一部訂正および内規に附記が行われた。事務局所在地は東京都文京区本郷3-30-10布施ビル(4階)内。「臨時会費納入者は、当該年度のみ本会の主催する大会および地方会に会員と連名で業績を発表することができる」とした。昭和55年(1980)3月には Eccles 教授が名誉会員に推薦された。

### 日本生理学会会則

(昭和57年3月31日改定)

1. 本会は日本生理学会と称する。
2. 本会は生理学の進歩発展をはかることを目的とする。
3. 本会は毎年1回大会を開いて会員の業績を発表討議し、総会および評議員会を開いて会務を評議する。大会の開催は前もって全会員に通知し演題を募集する。なお会員は各所在地において適宜地方会をつくり、業績を発表討議することができる。
4. 本会は会員の原著、大会および地方会の講演抄録を発表するため機関誌邦文の日本生理学雑誌を発行し、欧文の The Japanese Journal of Physiology を編集する。
5. 会員は、本会の趣旨に賛成する同学者で評議員の紹介あるものに限る、会員は年額6,000円の会費を負担し、学会および機関誌に業績

を發表することができる。また日本生理学雑誌の頒布を受ける。

学校、図書館、研究所などの団体は準会員として年額8,000円の購読料を前納し、会誌の頒布のみを受ける。

特別会員は多年本会に功労のあった会員で、評議員から推薦され総会の賛同によって定められる。特別会員の会費は免除される。

名誉会員は、本会に多大の貢献のあった外国人で、評議員から推薦され総会の賛同によって定められる。名誉会員の会費は免除される。

6. 本会の役員には評議員、常任幹事、当番幹事がある。

7. 評議員は本会の中核となる会員であって、評議員の推薦により選考委員会を経て評議員会に附議して決定される。

評議員会は毎年大会の際開催され本会に必要な事項を評議する。

評議員会は地区別に定数の常任幹事を選出し、日常および緊急の会務を委嘱する。

8. 常任幹事の中に庶務・会計・編集等幹事をおく。

9. 当番幹事は大会の開催を引受けた評議員であって、大会の一切の事務を行なう。大会終了後次回当番幹事に事務引継を行なって任期を終わる。この任期中は常任幹事会の一員に加わる。当番幹事は大会開催中常任幹事会・評議員会および総会を招集しこれを司会する。

10. 常任幹事会は必要に応じて各種の専門委員会を設け委員を委嘱することがある。必要に応じてその委員は常任幹事会に出席し専門事項の審議に参加する。

11. 本会の会計年度は毎年1月に始まり12月に終わる。

12. 本会の事務報告は総会および日本生理学雑誌に発表する。

13. 本会の事務所は東京都文京区本郷3-30-10 布施ビル(4階)内におく。

14. 本会則を変更するには評議員会の決議を経

て総会の承認をえなければならない。

附 則

＜常任幹事に関する事項＞

全国8地区にわけ各地区の評議員の互選によって常任幹事を定める。地区およびその定員は下表による。任期は3カ年とし重任を妨げない。選挙の際選挙管理委員会を設け選挙事務を委嘱する。選挙の結果は日本生理学雑誌上に報告する。

幹事の選出区分	定員 (計29名)
北海道地区	2名
東北地区	2名
関東地区(新潟を含む・東京を除く)	4名
東京地区	8名
中部地区	4名
近畿地区	4名
中国四国地区	2名
九州地区	3名

内 規

- 1) 評議員選考基準：多年本会員として在籍し相当の生理科学の業績発表があり、満5年以上の研究歴があるもので本会評議員の推薦がなければならない。
- 2) 評議員は The Japanese Journal of Physiology を購読するものとする。
- 3) 会費滞納の会員は会員の資格が自然消滅する。
- 4) 庶務幹事は必要な場合に限り日本生理学会代表と称することができる。
- 5) 常任幹事会で選ばれた2名の監事が本会の会計を監査する。
- 6) 本会に次の常置委員会をおく。日本生理学雑誌編集委員会、The Japanese Journal of Physiology 編集委員会、評議員選考委員会。
- 7) 文部省科学研究費補助金審査委員候補者の選出方法は別に定める。
- 8) 臨時会費として3,000円を納めたものは、当該年度のみ、本会の主催する大会および地方会に会員と連名で業績を發表することができる。

表1. 昭和47年(1972)以降の日本生理学会各種幹事ならびに専門委員会役員

	昭和47年 ~昭和50年 (1972~1975)	昭和50年 ~昭和53年 (1975~1978)	昭和53年 ~昭和56年 (1978~1981)	昭和56年 ~昭和59年 (1981~1984)
庶務幹事	内 藺 耕 二	内 藺 耕 二	伊 藤 正 男	伊 藤 正 男
会計幹事	伊 藤 正 男	伊 藤 正 男	星 猛	星 猛
編集幹事	塚 田 裕 三	塚 田 裕 三	塚 田 裕 三	酒 井 敏 夫
監 事	名 取 礼 二 富 田 恒 男	名 取 礼 二 真 島 英 信	真 島 英 信 佐 藤 昌 康	真 島 英 信 島 津 浩
選挙管理委員会		真 島 英 信	真 島 英 信	島 津 浩
会 則 委 員 会	本 間 三 郎	井 上 章	島 津 浩	島 津 浩
評議員選考委員会 (教授候補選考委員会)	勝 木 保 次 間 田 直 幹 高 木 健 太 郎	井 上 章 名 取 礼 二 真 島 英 信	真 島 英 信	高 木 貞 敬
研究費委員会	佐 藤 昌 康	島 津 浩	田 崎 京 二	御 手 洗 玄 洋
生理学教育委員会	高 橋 恵 本 間 三 郎	酒 井 敏 夫	大 村 裕	菊 地 録 二
生理学教室史 編 集 委 員 会	名 取 礼 二	名 取 礼 二	名 取 礼 二	酒 井 敏 夫
生理学用語委員会			酒 井 敏 夫	酒 井 敏 夫
J. J. P. 編集委員会	吉村寿人・勝木保次・岩間吉也・渡辺 昭・真島英信・入沢 宏			
国際交流委員会			本 間 三 郎	
生理学交流委員会		内 藺 耕 二	内 藺 耕 二	

註：J. J. P. 編集委員会委員長は2年毎に改選される。

表2. 学会支出決算と繰越金および会員数一覧

	支出決算額 円	次年次への 繰 越 金 円	会員数 名
昭和25年度	605,501	111,968	
昭和35年度	2,626,867	1,283,866	1,634
昭和47年度	8,153,594	773,073	1,938
昭和48年度	8,538,537	320,913	2,044
昭和49年度	10,766,808	404,667	2,188
昭和50年度	11,163,253	609,052	2,236
昭和51年度	14,293,455	314,761	2,356
昭和52年度	14,390,770	2,524,300	2,451
昭和53年度	17,101,497	2,435,178	2,817
昭和54年度	16,979,274	3,502,325	2,904
昭和55年度	17,496,522	4,946,352	3,123
昭和56年度	24,899,062	4,088,594	3,195

支出決算額および繰越金はその年度の1月1日より12月31日までのもの。  
会員数調べは年度表示の翌年学会大会時調べのもの。

昭和56年(1981)4月本学会は国際生理科連合事業である「発展途上国における生理学教育の促進」に対する援助募金を行い、その目的とする行為を行った。この外、昭和50年4月以降の常置委員会と、それぞれの幹事および委員長・役員の変遷は表1のとおりであった。

各年度の決算報告は会計幹事が総会に報告し承認をえており、その中から最近10年間の支出額および繰越金を一覧表にすると表2の如くであった。また、会員数の変遷を同表中に示した。

日本生理学雑誌ならびに Japanese Journal of Physiology の出版状況

昭和48年(1973)4月、編集幹事は真島英信教

授から塚田裕三教授に継承され、塚田編集幹事は昭和56年(1981)4月まで、鋭意日生誌編集の任に当たった。しかし、編集幹事継承の時期に、いわゆるオイル・ショックに直面、経済的に不安定となり、本学会会計もその余波を受け危機に立った。常任幹事会は、昭和48年12月、日生誌縮小計画を決意し、編集は1号50頁を目標とすることとなった。やむをえず総説の掲載に対する学会補助を中止した。この頃から原著論文の投稿も少くなり、毎号1篇の原著論文掲載も不可能となり、号によっては原著論文無しの時もあった。それでも、日生誌の発行は敵として続ける努力が行われた。一方、原著論文の激減にも拘らず、各大会の抄録および各地区生理学談話会の抄録は年毎に増加して行った。因みに、昭和57年(1982)4月までの各地区生理学談話会の開催回数は次の如くであった。生理学北海道地方会は50回、東北生理学談話会は14回、生理学東京談話会は212回、中部生理学談話会は28回、近畿生理学談話会は63回、生理学中国・四国談話会は33回、西日本生理学会は31回と年輪が加えられた。これと並行して、各生理学教室の業績である日生誌掲載の論文表題集の頁数は、益々増加し、昭和55年度日生誌第42巻では122頁ともなり、各巻の6号より掲載し始めねばならない状態となった。

昭和56年(1981)4月、塚田幹事に代って酒井敏夫幹事が編集幹事に選出された。編集委員会(酒井敏夫、馬詰良樹、上山章光、田中勳作、中村嘉男、平野修助、菅野富夫、中浜博、新島旭、永坂鉄夫、品川嘉也、村上恵、河田博)は、日本生理学雑誌編集の現状分析(日生誌43巻、5号、1981)を行い、結論として増加する論文表題集を日生誌編集から切り離し、それによってえられる余剰頁を本誌が使命とする在るべき内容に戻すべき措置を学会に問い、昭和57年、第44巻より実行に移した。したがって、これまで日生誌各号に掲載されてきた論文表題集は、日生誌号外として昭和57年(1982)7月に発刊した。この措置により、日生誌には再び総説などが掲載されるようになり、さらに「生理学

の広場」なるコーナーも開設されるようになった。

Japanese Journal of Physiology の発刊についての経緯は、吉村寿人教授によって昭和48年(1973)日生誌35巻12月号誌上に詳細な記載が行われている。

第24巻は勝木保次委員長の下で編集され45編(666頁)が掲載された。第25・26巻は岩間吉也幹事が編集委員長に当り、それぞれ60編、727

表3. Japanese Journal of Physiology の発刊経過

発行年	巻(Vol.)	編数	頁数(Page)	編集委員長
1950(6)~1951(3)	1	40	338	久野 寧
1951(8)~1952(7)	2	39	332	"
1952(11)~1953(12)	3	37	326	"
1954(3)~1954(12)	4	48	333	"
1955(3)~1956(2)	5	46	431	"
1956	6	35	340	"
1957	7	39	365	"
1958	8	38	404	"
1959	9	55	516	"
1960	10	63	681	"
1961	11	67	683	"
1962	12	55	663	"
1963	13	53	656	"
1964	14	55	668	"
1965	15	55	652	"
1966	16	58	718	"
1967	17	55	754	"
1968	18	64	797	"
1969	19	70	885	"
1970	20	58	740	"
1971	21	52	708	吉村寿人
1972	22	47	683	"
1973	23	46	666	勝木保次
1974	24	45	647	"
1975	25	60	788	岩間吉也
1976	26	56	726	"
1977	27	58	820	渡辺 昭
1978	28	60	873	"
1979	29	67	833	真島英信
1980	30	83	981	"
1981	31	84	985	入沢 宏
1982	32	95	1,080	"

頁;56編 788頁であった。その後、編集委員長には、真島英信幹事、渡辺 昭教授が2巻ずつの編集を行い、現在(昭和57年8月)入沢 宏幹事がその任に当たっている。第29巻からは原著的性格の Short Communication が掲載されることになった。1950年、第1巻より、昭和57年(1982)12月までに刊行された巻数は32巻で、この間の各巻掲載の論文篇数および頁数は表3の如くである。

また、昭和57年(1982)4月現在の発行部数は1,600部でその中、海外向けには465部があった。

#### 各種常置委員会の活動

##### (1) 生理学教育委員会

昭和48年(1973)1月、高橋 恵委員長の急逝により、副委員長の本間三郎幹事が委員長となり継続事業としての生理学学生実習設備改善のための調査および改善のための要望書案の作製に当たった。第52回大会(昭和50年4月—1975)において、本間委員長は次の如き提案を行った。すなわち、生理学教育委員長の選出については、国立(公立)および私立大学の教授が交互に選ばれることが望ましく、副委員長には前回の委員長が当り、新委員長を補佐する。この提案は、現在に至るまで履行されてきた。

本間委員長に続いて、協議の結果、酒井敏夫教授が推薦された(昭和50年4月)。酒井委員長は、前委員会の意向を尊重し、生理学学生実習設備改善を推進するためには実習内容の検討が必要であるとの立場から、生理学実習書の編集を企画した。これには前委員会時代から大村裕委員が各大学生理学教室で作製していた実習書の調査を行っていたので、これを基礎資料として、教育委員会は昭和52年(1977)3月「生理学実習書」の編集・刊行を行った。生理学実習書の出版後、委員会は本間、大村、酒井を窓口として生理学実習改善の要望書を草し、これを文部省に提出した。これによって、国立大学系生理学教室には生理学実習改善の予算的措置が行われた。

## 生理学実習書

日本生理学会編

南江堂

昭和53年(1978)4月には、大村 裕教授が委員長となり、先に出版した生理学実習書を背景としてVTR作製に意を注いだ。各委員は、それぞれの分担課題の実習用VTRの作製を行った。この作製には、本間委員が班長となった科研費補助金が大きな支えとなった。作製されたVTRは、英文化された生理学実習書小冊子(Physiology Laboratory Manual For Medical Students, 1980)と共にブタペストで行われた国際生理学会に展示され、大村委員長自ら口演デモンストレーションを行った。実習書の英文化には、日本生理学会国際交流基金からの援助があったがこの外、市河三太委員が物心共に大なる協力を行っている。これまでの委員会は精力的に活動を続け、大会毎に教育シンポジウムを開催した。

その後、第58回大会(昭和56年4月—1981)からは菊地鎌二教授が委員長に選出され、今日に至っている。この間、第59回大会で行われた解説講演のVTR作製および日生誌掲載に努力を払った。

**(2) 国際交流委員会**

昭和53年(1978)4月、伊藤庶務幹事より国際交流委員会設置の提案があり、委員長には本間三郎幹事が当った。委員会は、国際交流基金の設立を目標とし、内容的には、①若手研究者の国際会議出席旅費の援助、②発展途上国の研究者援助を主たる事業の立案を行い、審議を行った。しかし、国際交流基金の運営は、規模が大きく一学会の事業としては困難であるとの結論に達し、昭和55年(1980)4月委員会としての任務を終了した。

国際交流委員会は解散したが、本林基金の残額および生理学実習書の印税を積みたてることによる国際交流基金なるものの費目は、学会会計の中に残すこととした。

**(3) 生理学交流委員会**

昭和52年(1977)5月、岡崎国立共同研究機構生理学研究所の発足に際し、同研究所の運用や日本の生理学の研究交流を検討する組織が必要であると内藤耕二幹事より提案(昭和52年4月)があった。この提案により生理学会は生理学交流委員会の設置を行った。本委員会は3年間の

活動を行ってきたが、昭和55年(1980)3月に至り初期の目的を達したもとして解散した。

**(4) 生理学用語委員会**

第3次「生理学用語集」(医学書院)は、昭和47年(1972)8月、故時実利彦委員長により出版された。昭和53年(1978)12月、常任幹事会は前書の改訂が必要であると判断し、生理学用語委員会の再出発を認めた。第56回大会(昭和54年4月)に学会は酒井敏夫幹事を委員長に指名した。生理学用語委員会は、同年12月より編集庶務委員会および編集専門委員会の構成の下に活動を開始、昭和57年(1982)3月には最終用語のカード整理を終り、出版の過程に入った。

**参考資料：**

日本生理学会雑誌 20巻, 完結記念号, 1033-1054(1958)

日本生理学会雑誌 34巻, 生理学特別座談会, 8・9号, 624-654(1972)

日本生理学会雑誌 35巻, 日本生理学会50周年記念号, 727-737(1973)

(昭和57年7月 記)



## 各 大 学 教 室 史

## 日本生理学教室史(上巻)の編集を終えて

日本生理学教室史編集委員長

酒井敏夫

昭和56年4月2日、徳島大学における第58回日本生理学会大会・評議員会および総会で日本生理学史編集委員長名取禮二先生は学長職激務の理由でその任を辞退したい旨の申し出をされた。本委員会の活動は、故浦本政三郎教授より創められ、故内山孝一教授を経て名取禮二教授に引継がれ今日に至っている。

委員会は、昭和41年(1966)以来各大学の生理学教室史を逐次、日本生理学会雑誌(日生誌)に掲載してきた。全教室史が掲載された暁には一本の成書に纏めることが構想であった。内山先生は、教室史が日生誌に掲載される毎に、それぞれの教室史に“付記”を書かれ、裏面史といふか精神史ともいふべき先生独自の史観をもって名文を飾られてきた。なお、教室史の日生誌掲載に当っては、名取先生が経済面で特別の考慮を払われ各教室史の世に出ることに努力されたことは特筆すべきことと考える。委員長交代に際して、名取先生から私に、これまでに出版された教室史の紙型ならびに凸版類が移管された。これらの保管は、上述の目的完逐の含みがあったからである。

突然の編集委員長交代で、今後どのような対応をして行くべきか逡巡したが、早速日生誌第43巻5号(昭和56年5月—1981)に「生理学教室史完成への希望と提案」を行った。昭和58年(1983)は、日本生理学会大会の60回にも当り、この60回という大会の記念の節目にも、と考え、完成期日をここに置いて当初から予定していた生理学教室史を含めた「日本生理学教室史 上巻」への執筆協力を要請した。日本生理学会大会が還暦を迎えるに当り、近代日本生理学が何処より来り、何処へと力強い歩み続けるであろうかを問う絶好の機会となることを祈念した。

実をいうと、どのような経緯で日本生理学教

室史の計画が創案されたか私自身全く知る由もなかったが、偶然のことから生理学会事務所の古い資料から、教室史準備委員会記録の断片を発見した。準備委員会は、浦本政三郎先生を委員長として、委員には内山孝一、鈴木正夫、戸塚武彦、富田恒男、名取禮二、若林 勲の諸先生方より構成されていた。委員会は、昭和33年5月12日より昭和34年1月17日に至る間に6回の協議を行い、その成案を、その年の常任幹事会に報告している。この時、次の如き編集の具体案が提出されたものと思われる。1) 図書名を日本生理学百年史とする。2) 本の大きさはB-5, 500頁位。3) 出版書店は未定。4) 本年度総会・評議員会の承認を経て直ちに執筆依頼を行う。この外、編集要領もあったらしく、別紙の如くと附記されている。しかし、この別紙なるものは見当らなかった。フェイルされていた昭和37年(1962)3月付の印刷物には、戸塚、内山、鈴木の3先生方が、それぞれ御自身の教室を中心とする教室史および研究概要の執筆見本を書かれた抜粋があった。これによると、日本生理学百年史編纂の構想は、教室史と研究業績の2部構成にあったと思われる。後者の研究業績は、各研究者より業績カードを集め、研究分野毎に適切な執筆者が纏めの作業をして行くという手順のようであった。生理学100年史編纂の構想を現時点で振り返って見ると倉敷で開催された第15回大会(当番幹事 暉峻 義等)(昭和11年10月)において浦本政三郎教授は「将来ノ発達ニ対スル現日本生理学ノ一、二ノ問題ニ就テノ考察」と題する口演をされている。このような口演が将来の上記構想に連なったものと考えられる。故鈴木正夫先生の日本生理学研究発展史—刺激生理学—(日生誌 第35巻, 746-760, 1973)は、この構想の一部ではなかったらうか。

以上の如き経過で、生理学教室史が日生誌に連載され始めたのは昭和41年(1966)からで、昭和50年(1975)までに旧台北帝大、旧京城帝大、旧満州医科大学を含む59教室分が陽の目を見ることとなった。折角のこの事業もオイル・ショックの余波による経済的理由から一時停止の止むなきに至り、残りの教室史は日生誌を飾ることなく経過した。

この間に、東京で第23回国際生理科学会議が加藤元一教授会長により開催(1965)され、同会議の記念誌小委員会は Japanese Physiology Present and Past を刊行した。この刊行の背景には生理学教室史編集委員会の役割りが大きな支えになったものと思われる。

故大沢謙二先生が、わが国での初の東京帝国大学・医科大学生理学教授になられたのは明治15年(1882)であった。奇しくも、本年(昭和58年)は百年目に当り、日本生理学教室は日本生理学百年史ともいうことができる。ここに日本生理学教室史上巻が上梓されることは、憶えば上述の準備委員会の構想が実現されることでもあり、その先見性に敬意を表したい。東大に続いて、日本各地に生理学教室が設置され、近代生理学の研究と教育は幾多の諸先達により引継がれ、今日の隆盛を迎えている。すでに、各大学の生理学教室においては欧米の生理学研究の影響を受けながら、3ないし4代目の教授を中心として、かつての啓蒙と充実の時代から創造と独創の世代に発展し、多くの俊英を輩出させつつある。この歴史的変遷には、生理学者という人間から人間へと伝えられてきた背景があり、今日の土壌が耕されてきたともいえよう。日本生理学教室史の編集をしながら感ずることは、各教室共に、それぞれの時代に在籍された諸先生方の熱烈な且つ献身的努力には襟を正すべき迫力が感ぜられ、これら先人への感謝の念に駆られる。

日本生理学会・日生誌編集委員会(前編集幹事塚田裕三)は先に大会50周年を記念して、「日本生理学会の沿革」(名取禮二)と「生理学の歩み」(戸塚武彦)を日生誌に掲載した。この時の座談会で、いづれ日本生理学の正史が近いうちに出版されるであろうと期待されたが、幸いにも、それから10年、いま正に日本生理学教室史上巻が誕生することとなった。執筆者の思いにより、各教室史の間には、形式および執筆要領などの違いはあるが、予期以上の大集成ができたことは、編集の任に当たった者として望外の喜びである。日本生理学教室史はとりも直さず、日本生理学会の沿革史でもある。したがって、この沿革史のために、前委員長が昭和48年(1973)に書かれた「日本生理学会の沿革」を本書に再録すると共に、その後の10年間の歩みを補足した。また、生理学会大会毎に記念撮影が行われているが、これは第1回から欠かすことなく継続され、日本生理学会雑誌に写真が掲載され始めたのは第43回大会(当番幹事、和合卯太郎、宮川 清)からであった。それ以前の記念写真は一、二を除き、笈底の奥に眠っており、いづれ飛散する運命にあるかも知れない。編集子としてもこれらの記念撮影は、本学会の正史のために貴重な資料と考え、敢えて掲載することとした。本史を上巻としたのは終戦後多くの生理学教室ならび研究所が創設されており、いづれこれらの教室・研究室史を編纂しなければならぬ時期が到来するであろう。これを続巻と考えた上での措置であり、そのための具体的体制が整えられることを切に望みたい。

擱筆に際し、本史の実現に情熱を傾けられ文字通り努力されたにも拘らず不帰の客となられた故浦本政三郎先生および故内山孝一先生に、完成の御報告をすると共に深い御冥福の祈りを捧げる次第です。

昭和57年8月9日

昭和58年4月21日発行

## 日本生理学教室史(上巻)

定価 25,000円

編集 日本生理学教室史編集委員会  
浦本政三郎  
内山孝一  
名取禮二  
酒井敏夫

発行所 日本生理学会  
〒113 東京都文京区本郷3-30-10  
布施ビル

印刷所 鶴岡印刷株式会社  
〒997 山形県鶴岡市山王町14-24

第二生理

日本生理学会

¥20,000.-